研究ノート

歴史論ノート

―自律史観に向けて―

永安幸正

はじめに――非常時の歴史論――
一、いのち史観とエコロジーの叡智
(一) 歴史をどう見るか
(二) 歴史をエコシステムとして考える
(三) 歴史には、倫理道徳が不可欠である
(四) 歴史には、時間と空間でのつながりがある
(五) 歴史は、いのちの複雑系である
二、歴史には、素・真・心の三実あり
(一) 歴史は、無限の素実から出発する
(二) 歴史観とは、無限の事実を整理する物差しである
(三) 因果律――相互扶助か闘争か――
(四) 歴史観により「真実」は編集される
(五) 歴史には、さらに「心実」という要因が働く
(六) 歴史教育では、三実を調和的に教える
参考文献

※外国人留学生の便のためにルビを多用する。

はじめに――非常時の歴史論――

かの『方丈記』のひそみにならって、人はいう、行く空の雲絶えず変化し、天才の戯もちて下界のわれらを幻惑す、と。

歴史とは、諸行無常の劇場であり演劇である。その歴史を研究し学ぶことの目的は、いずこにあるのか。人類のあらゆる活動の総合が、時間の流れのうえで、かつ空間の広がりの舞台で、どのように積み重なり、構造変化し、自己創造し、栄枯盛衰を遂げるのか。それを貫く法則を明らかにすることにあるといえよう。

われわれ人類は、みずからの行く末について、気がついてみると、不安の気分に襲われる。自分の就職は大丈夫か。この会社に入ってやって行けるか、この会社は倒産しはしないか、年金はもらえるのか、日本国は大丈夫か、民族が衰退するのではないか、と。

歴史は、こうした不安を乗り越え、生きる自信とヒントを与えてくれる宝の山である。

歴史は繰り返すと言われる。しかし、よく調べてみると、繰り返すことは決してない。けれども、さらに吟味すれば、永遠の法則と思われるものが、見えてくるようにも思える。

たしかに、人は必ず死を迎える。有史以来、何百年、何千年の時が過ぎたか知れないが、死ななかった人物は記録されていない。また、病気もする、争いもする。これはみな「いのちの相」であり生き様である。伝記を読めば、個人として、どのような歴史を作ったかを、学ぶことができる。国家の歴史を繙けば、集団としていのちの栄枯盛衰が顕れる。

にもかかわらず、われわれは希望に満ちた持続的発展という人類の課題を、そうした歴史から探求したいものである。

ところが、われわれ人間というものは、「無知の宇宙」の中に生きている。いわば、真っ暗闇の中では柱があると分らず、頭をぶつけてはじめてそれを思い知らされる。

これは、二十世紀、大革命家レーニンの言葉であったかと思うが、まことに言い得て妙ではないか。

われわれ日本人は、幸いである。二十世紀の終わりころから長い経済停滞と政治不信と社会不安の中で、「祖国が亡ぶのではないか」という危機感を懐き始めた。日本は、お隣りの中国に追い抜かれるのではないか。子供の数が先細りし、老人ばかりの国となるのではないか……。

このように心配し始めた。大変よいことである。

元来、人は心に深い衝撃を受けると、傷つき、その後遺症にさいなまされるという。今日のわれわれ日本人は、先輩たちが二十世紀前半に行った「支那事変」、「大東亜戦争」、「日中戦争」そして「太平洋戦争」――ともに歴史上、当時実際に使われた呼び名だから、そう言っておく――から生じた「心的外傷後ストレス症候群」（PTSD）によって無意識に心を縛られているのではないか。まさしく、歴史論のPTSDである。

日本の歴史論はふらついている。半世紀前の戦争への責任論と、歴代政府による謝罪外交の繰り返し、それに歴史教科書問題も重なって、「日本は悪いことばかりをした国だ」「われわれの世代はその祖先の子孫だ」という罪意識がある。謝罪症候群という種類のPTSDである。

逆に、「いや日本は何も悪いことなどしていない」「植民地解放という偉大なる世界的使命を遂行したのだ」という反発や自己弁護もあって、心の葛藤が消えない。

このことが、日本人から元気をなくさせているのではないか。これでは、とても危機の淵から這い上がるどころではない。

しかし、よく考えてみれば、不安は、日本と日本人にとって、「またとないしあわせ」ではないか。私はそう考える。なぜか。

今の世代が、国家は没落するかもしれぬ、という危機意識を経験しつつあるということは、「柱があるらしいぞ」ということを、暗闇の中で薄々気づき始めていることを意味するからだ。柱には、まるっきり知らないでぶつかるよりも、承知のうえで出合うほうが、少しはましだ。

われわれ日本人の今の危機意識、というより不安は、国家という「いのち集団」が存在すること、その国家というものが、悪くすれば滅亡するか衰退するものであるということを、日本人が自分たちの祖国日本について心配し始めたことの証しである。やはり危機においてこそ、物事の本当の姿は現れる。人は危機において、はじめて本当のことを知りたがるようになる。

健康な時は思いもしないが、胃をこわしてはじめて胃のありかを考えるようになる。国家の問題も、これと同じではないか。

一九二〇～四〇年代にかけてドイツにカール・シュミット（一八八八～一九八五）という一人の哲学者がいて活躍した。この人はまさしく「危機の哲学者」であって、「異常な事態を手掛かりにして物事の本質を解読する」ことに比類なき鬼才を発揮した。

わが祖国日本は、異常な事態に直面しており、非常時の真っ只中にある。だから、われわれ日本人とは、日本国家とは何か、その本当の姿をつかむにはもって来いの時代に、われわれは住んでいる。

われわれ日本人は、今こそ、誰もが「危機の哲学者」にならねばならない。

私は、この歴史ノートを、二つの問いを込めて書き綴っている。一つは、人類はいかにすれば争いを減らして平和を実現することができるかという問いである。もう一つは、日本という国家と日本人という国民集団が、いかにすれば永続し発展できるかという問いである。この二つの問いは、以下のような意味で絡み合っている。

日本にとって今後の人類の平和を実現するという面で重要なことは、東アジアの隣国との付き合いを仲よくしていくことにある。この隣国との仲のよい関係とは、日本国家が国力を維持し、日本人という国民自身がゆるぎない意志をもち、相手を尊敬しつつ、しかし卑屈な心を脱して、正々堂々と付き合うことから生れるものである。

国力が衰えると思い込み、国民の気力が萎縮してしまえば、その国は将来必ずや隣国から内政干渉と領土侵略と精神的蔑視を受けることになろう。実は、かつて清国という隣国が国力が衰え、その目にあったのであって、ロシア帝国、欧米列強が喰いちぎり踏み込んだ。そして日本もそれに乗じたのであった。日本も「自存自衛」の意図の下に日清、日露、そして日韓併合へと行動した。

その時、一番割りを食ったのは、清朝時代の中国大陸（China）と朝鮮半島（Korea）、及び東南アジア各地の人々である。ロシアからは領土をむしり取られ、イギリスからアヘン戦争を仕掛けられ、あるいは昨日の弟分によって併合された。自衛力がなくなると国家と人民の独立は危うくなる。

そして最後に、大東亜・太平洋戦争の中では、欧米植民帝国への戦争と、中国大陸での戦いとは意味が異なる。対欧米戦は自存自衛戦であり、植民地解放戦でもあったが、日中戦争になると侵略した。対中国戦で

は侵略戦争であったのである。これを取り違えてはならない。

日本は、ペリー来航のように明治維新の前から、太平洋を挟んでアメリカという膨張する隣国との間で、宿命的な敵対関係に嵌まり、とうとう真珠湾攻撃に始まって、いのちをかけた戦争に突き進み、そして一敗地にまみれた。大東亜戦争・太平洋戦争がそれであった。人種的偏見をいだく白人国家を相手にして、大陸の利権を争った。だが、対等の国際関係を築くことができなかったのであり、結果、周知のように敗戦後、対米従属といわれるような関係が五十年間も続くことになった。

だから、中国の古典にいう遠交近攻――遠い国と親しく交わり隣国とは敵対する――という国際関係の見方は、悲しいかな、今でも一面の真理なのである。どこの地域でもそうだが、隣国というものは、なかなか侮れないものであり、正々堂々とフェアプレーでもって付き合わなければ、しこりのある関係が固定化する。日本に向けて繰り返される謝罪要求は、そのようなしこりが存在する証拠である。

どこの国であれ、その隣国から、遠い過去の事件について、いつまでも謝罪の要求が繰り返し繰り返し持ち出されるとすれば、将来の子供たちにとっては、堪えられないことだろう。「いい加減にしてほしい」と。十九～二十一世紀における東アジアの隣国同士のかかわりあいは、まさにこのワナにとらえられていて、どうもお互い心が晴れないままである。これを何とかせねばならぬ。

しかしこれからは、遠交近攻を全面の真理としてはならない。新たにより優れた真理を探求すべきだろう。それは何だろうか。

われわれは、**遠交近攻を転換して「遠交近交」を理想としなければならない。**グローバル化とは、「どこの国ともお互いに隣国となる」というような世界なのであり、隣国が地球全域に拡大することなのである。

しかし日本は、シベリアのロシアに加えて、東アジアの隣国との間でも、領土問題、植民地支配の問題、戦争被害の補償の問題を抱えており、宿題を残している。その宿題をいかにして解決するか。

相手がおかしいので、そのような宿題なんて存在しない、という立場もあるが、現実に相手国から「宿題あり」と言ってきている。そういう隣国から逃げるわけにはいかない。日本列島を移動させることは不可能だ。どうすればよいか。

そこで、私は、国際関係の側面において、傲慢で排外的な**自尊史観**を捨て、逆に卑屈な**自虐史観**も取らず、謙虚な**自律史観**というものを提唱したいのである。

東アジアに止まらず、地球全域に拡大する隣国の間で、日本が一つの国家として正々堂々と行動するには、まず日本自身がしっかりとアイデンティティを確立してそれを堅持し、対等の国家責任を負いつつ、公正に国家主権を行使するのでなければならない。

その意味で、日本の「謝罪外交」に表れた主権喪失の状況は、アメリカへの関係で行われてきた「従属外交」の側面とともに、マイナスの遺産であって、払い清めねばならない、と私は考える。

どこの国でもそうなのだが、万国の間に伍して正々堂々と行動できる国家であるには、

①自律の国民歴史観
②自律の国民経済力
③自律の国民政治力
④自律の国民文化力

というものを持たねばならない。アイデンティティの確立とは、この四つの側面の自律を統一的に確立する

ことである。

これを開発論では「ネーションビルディング」（国づくり）といったが、遅れた国の場合だけでなく、日本のような発展した国でも、国家と国民を新たに構築し直すときには、やはりネーションビルディングなのであり、その柱はこの四つからなるのである。私はこうした見方を、一橋大学名誉教授、板垣與一『アジアとの対話』第一～第五集、論創社、から学んだ。

一国の経済も政治も、国民各自が心の根柢すなわち魂というものを失うと、危機から立ち直れず、困難を乗り越えられない。一方で高い自殺水準、低すぎる出生率、それに急増する凶悪犯罪、特に不法滞在外国人による犯罪の激増は、日本という国家社会が、国民が、安全と安心との双方で、底抜けの状態になっていることを物語る。

このノートでは、この四つの中で特に歴史観と文化観について、自律の条件と内容を検討したい。歴史と文化とにおいて誇れるものを失った国家と国民は、自己を自己たらしめる精神の根柢を失ったものであり、やがて瓦解するからである。

では、その根柢の内実は何だろうか。

国民の精神の根柢には、さまざまな要因が含まれるが、ズバリ言って私は、われわれ日本人としては、日本の歴史と文化の中心であり続けた「天皇・皇室を中心とする民族集団の本質」――これを先人は、特別に「國體」と名づけた――というものを、新たに自覚し直さねばならぬと考える。この本質は、長い間に形成されたもので、日本民族が物を産み出す力と、いのちの集団として纏まる在り方とから成る。

私がこの点に注目するのは、決して過去一時期の狂信的、排外的な国家主義の再興を意図するからでは

ない。天皇と皇室というものの働きを「永続的ないのち」の象徴として理解し直すことなのであり、その平和的、生命的、文化的な本質をもう一度「掘り起こす」ことなのである。

歴史の本を出版するときにおいて、天皇の問題――批判ならよいが、プラスの意味を込めて――を採り上げるのは、得策ではない。そうすることで、受けつけてくれなくなる出版社が殆どである。そうした書物は、大部分の出版社から出版を拒否される。保守というより「反動」のレッテルをはられるのが落ちだろう。しかし、それでも、天皇の問題をとりあげる必要があるのはなぜか。

わが「日本」とは何か、ということを考え直す歴史観は、今日両極から台頭しているが、そのとき、一方に私のいうこの「国民生命力の核心」たる天皇の問題を骨抜きにし、あるいは否定するコスモポリタン的な傾向も現れつつあるからである。それは自己解体をもたらす危険な兆候ではないか。人類はまだ未発達であって、コスモポリタンでは生きられぬ。

人類は、単に人格とか、人間性とか、市民性とか、民主主義とか、人間愛というようなものを抽象的に考えるだけでは、生存できない。画一的なグローバル化に対抗して、かえって各民族や国民の文化的多様性が強調されるゆえんである。抽象的なものが抽象的なままに存在して働くことはあり得ず、それは特殊具体的な歴史を背負い文化を帯びてしか働かない。

われわれは、良くても悪くても、いや、善し悪しの議論を超えて、後に述べる素実・真実・心実を一貫するものとして、日本史の核心として、天皇と皇室における本質を理解し直す必要がある。歴史論からそれを意図的に外すことはできない。外すことは、日本の国家、民族、国民の生命力を構成する遺伝子の核心を取り外すことに等しい。それは根本的な愚行である。

むろん、一方で、歴史への反省のない、自国優越の傲慢史観をそのままに保存してはならない。つまり、偏狭で暴力主義を振りかざす誤った史観がそれである。これは天皇と皇室を称えるようでいて、実はかえって甚だしくその本質を歪め、存続を危くするものである。いわゆる皇国史観すべてがいけないのではないが、その誤れる形態のものはいけないのである。

他方、われわれ日本人は、外国製の特定のイデオロギーに基づいて、外国モノサシ主義を採用し、自虐的な無国籍史観に走ることもできない。無国籍史観には、各国の文化的個性を無視して、欧米の個人主義と自由主義を唯一絶対とみなす国家観・歴史観がある。また、マルクス主義の階級闘争史観・社会主義史観も存在する。

われわれ日本民族・日本国民は、みずからの歴史事実と文化に基づいて、先人の苦労と念願を受け継ぎながら、自律的な歴史観を樹立するほかないのである。先人の恵みと徳を感謝して受け止めつつ、謙虚にして柔和なる者だけが、この大地を継ぐのではないか。私は、そのような歴史観を模索したい。

このノートでは、専門的議論としてではないが、大東亜戦争に関する発言、建国神話、天皇と皇室とに関する問題提起を行っていく。読者には、そこだけを見てページを閉じることなく、最後まで読み了えられ、私のひそかな意図を汲み取っていただきたい。その上での反論と批判は、大いに歓迎したい。

日本の歴史論といえば、教科書論争が盛んであるが、そうした学校での歴史論以前に、国民の日常生活における、大人たちのための、親たちのための、歴史論が求められるのではないか。われわれ国民の、老若男女すべての、毎日のいのちを強化する歴史論が求められるのではないか。

大地の下の水脈のありかを知ることは、国民のいのちを左右するすべての作物づくりにとっての大前提である。歴史と文化はそうした水脈であり地下水なのである。

歴史は民族にとって唯一の心のよりどころとなる。それは長い間にわたる先人たちの艱難辛苦を積分したものであって、先人が「いのちを発展させたい」、「子孫を繁栄させたい」との悲願から行った、あらゆる努力の積み重ねにほかならず、そこには、現代の非常時を乗り越える知恵が秘められているのではないか。

古代ギリシアのプラトンがいみじくも言い表わしたように、人間は、所詮、不完全動物であり、欠陥動物である。誤りも犯すし成功もする。自分も他人も、幾多の成功と失敗の経験を持つのだ。その成功と失敗を冷静に学習すれば、危機の峠を踰え、心のＰＴＳＤを脱することができる。かくて私は、歴史について、次の点を述べたいと希う。

歴史は、いのちの複雑系である。
歴史は、いのちのエコロジーによって解読される。
歴史は、素実、真実、心実の三実からなる。
歴史は、時間と空間とを軸にして展開する。
歴史は、いのちの争いを乗り越え共生を求める歩みである。
歴史は、個人の歴史のみでなく、家族、国家、世界人類の歩みからなる。
歴史は、心実として神話を創りだし、いのちの知恵を語る。
歴史は、人生の知恵の心理学をふんだんに教える。

歴史は、国家改革の原理と発展の法則を物語る。
歴史は、国際関係における平和建設の指針を暗示する。
歴史は、持続的発展に向けての「いのちの道」を開示する。

わけいっても
　わけいっても青い山　　山頭火

われわれは、山のあなたに、希望の地が約束されていると思いたい。これから、峠の頂を目指して登り続けよう。そして、われわれの、人類の子孫のために、歴史を造っていこう。

一、いのち史観とエコロジーの叡智

(一) 歴史をどう見るか

われわれ人類の理想は、この世における「いのち」の安定した調和と共生である。しかし、歴史の現実は、いのちといのちの間の不安定な分裂と抗争である。

ドイツのヘーゲル（一七七〇～一八三一）は、ベルリン大学の教授で、日本でいえば江戸時代後半の人だが、一七八九年に起こった隣国のフランス革命から多大の影響を受け、壮大な哲学をうちたてた大学者であった。歴史哲学の講義で彼は、人類の歴史は自由を求めての歩みである、**世界史とは自由の考え方の発展にほかならない**、と述べている（ヘーゲル『歴史哲学講義』長谷川宏訳、岩波文庫、下巻、三七三ページ）。

いままでヘーゲル物の訳といえば、極めて難解な日本語のものばかりであったのだが、今回の長谷川訳は実に分かりやすい訳文となっている。翻訳の歴史も進歩するのであろうか。

世界史に関するヘーゲルのこの自由説は、なるほどと思われるが、しかしさらに、単なる自由のみでなく、さらに**人間は「しあわせ」を求めて歩む**、というほうがより本当ではないか。

では、しあわせとは何か。「しあわせだと自分が感じること」であり、そう思う状態のときがしあわせのときのことなのだ。そしておそらく、しあわせは、安心や楽しさや喜びといった心の状態であろう。

しかも、しあわせな人と一緒にいると、それだけ自分もしあわせになるであろう。ならば、そういうしあわせな人を自分の周りに増やすようにすれば、自分もいっそうしあわせになるのではないか（経営コンサルタント、船井幸雄さんの説）。――

こう考えると、人類の歴史も随分と変わっていくに違いない。

けれども、歴史には悲しい事件が起きている。

歴史は人間の生と死の記録にほかならない。

街ではどうか知らぬが、農山村で――漁村でもそうだろう――昔の墓場に行くと、小さな石が据えてあるだけで、それに名前も何も書いてないものがある。その多くは、「間引きされた胎児か嬰児のためのものなのだよ」と古老から教わった。子供は「七つまでは神のうち」といって、聖なる神が守ってくださる筈なのに、間引きされるとは、悲しさの極み。

悲しむべき「間引き」については、江戸時代の「邊土民間子孫繁昌手引草」というものに、次のように

言われている。

「田舎にては、所によりて、貧乏人に子供の多きは、身代のかせ（障害）なりとて、産おとしたるとき、口を塞ぎ尻を押へてひざにしき殺し、又は産まぬさきに、飲ぐすりさしくすりにて流すを、子返といひ、又子まびきといふ。……萬物の靈たる人間が、鳥獣だにせぬ、子返をするは、餘りなさけなきことなり。子返をする者壹人にてもあれば、其村の不吉なり。……早く異（怪）見して止めさすべし。捨ておくは、無慈悲なり。人に子返を止めさすれば、堂塔を建立せしより大なる功徳なり。」（下中彌三郎編『日本史料集成』平凡社、昭和三十一年、三六七ページ、新字体、ルビ追加）

間引きは、百姓町人のみならず、武士の家庭でも行われたようであるが、この文は、間引きは人口減少をもたらし、生産労働力を少なくし、社会の生産力を停滞させることになるとして、禁止するようにという趣旨である。

幸いなことに、私自身はそのような時代に生まれ合わさなかったので、危ない運命を免れ、楽しいこの世に生まれ、生きて空気を呼吸している。考えてみれば、自分が間引かれなかったのは確かに有難いことである。時代と親祖先に感謝しなくてはならないと思う。

今日では、そういう墓場の小石さえ見当たらない。病院において現代版の間引きの試練に出会った幼い生命は、密かに医療実験か移植の材料に提供され、残りは医療ごみとして、空中に散り、灰に還る。いのちは、物質として扱われる定めにある。堕胎とは、人の手で、いのちを物質に還元するという行為なのである。

間引きは、それを行う者としては、いたたまれぬ気持ちであったろうが、今日の堕胎ではそれを行う者の気持ちはいかなるものであろうか。

歴史とは、いのちの栄枯盛衰の流れである。いのちの育成から始まる相互作用の流れであり、栄枯盛衰の道である。それは暗黙のうちに、こうしたいのちの選択と廃棄を含んでいる。

幸いにも、母の温室からこの世に生まれ出ることのできた人々は、人と交わり、助け合う。逆に、競い合い、排斥し合い、殺し合う。それがいのちのありふれた姿であろう。

われわれは「いのち」という存在であり、**空間**と**時間**の中に生きる存在である。しかも個々のいのちは、数学の点ではあり得ない。

数学の点は、「位置」はあるが、時間空間の「大きさ」はもたない。ただ、そうであっても、ある一つの位置を、異なる点が奪い合うことはできない。奪ったならば、もはや同一の点になり、異なる点ではなくなる。しかしともかく、重ねることはできる。数学にいう点というものは排斥し合わない。

しかし、いのちという点は、大きさを持っているから互いに排斥し合う。二人の人は、一人掛け用のイスに、同時に座ることはできない。

このように、われわれの生命が、時間の面でも空間の面でも、共に大きさのある点だということが、争いの起こる原因である。いのちは、時間空間の大きさをもった一点を占めようとすれば、あるいは点が接触すれば、排斥し合い争いが起きる。そこに、どうしても歴史が争いの歴史となるゆえんがあるのではないか。

昔、カール・マルクス（一八一八～一八八三）が唱えた唯物史観では、いのちの争いという性質に注目し、人類の歴史は階級闘争の歴史であると主張した（『共産党宣言』岩波文庫）。古代貴族社会における貴族対農奴・農民、封建社会が出現するときの貴族対新興武士・農民との間、資本主義社会での資本家と労働者という階級間の争いを強調する。

たしかに、争いの単位が、そういう階級の形をとることもあるが、私の歴史観では、歴史の根本に階級単位での争いというだけでなく、いろいろな形での「いのち」の争いがあると見る。

身近な夫婦げんかも、兄弟げんかも、親子げんかも、国盗り物語も、帝国主義と植民地支配も、貿易摩擦も、戦争も、テロも、みんないのちの争いの例である。その争いをどうにか乗り越え共生していこうとする所に、歴史の理想はあると考える。これが私の「いのち史観」の仮説である。

歴史は、いのちの争いと助け合いによって動いて行く。いつも仲良しだけから出発して動いて行くとは限らない。

人間のいのちは、男性側が放出する一億から三億の精子のうちの一個と、女性側の一個の卵子との、運命的な結合から出発し、その細胞が分裂して増えることから始まる。そして母と子が誕生によって分れ、子はその時から人生に船出し、社会に出ては鬩ぎ合いを経験するなかで、仲良く共生することを目指し努力して行く。

こうして、人類も含めた生命系（エコシステム）では、分裂し抗争するだけでなく、協力し扶け合う関係もある。あるいは、食物連鎖といって、牛が草を食み、その牛は人間に食われるというように、一切の物が他への犠牲となり「循環」し合う。このプロセスの中には、競争も共生も織り混ざっている。人類の歴史といえども、こうしたエコシステムの歴史の一部分なのではないか。

（二）歴史をエコシステムとして考える

私のいういのち史観を理解して頂くために、はじめに、エコシステムの仕組みをかい摘まんで説明しておきたい。

地球上では、いのちは生態系つまりエコシステムをつくり、そのことを研究するのがエコロジー（ecology）、生態学という学問である。エコロジーの見方を採り入れて、人類の文明と歴史を考察するという研究では、梅棹忠夫『文明の生態史観』（中央公論新社）が先駆的なものであった。

東西の出合いなどといって、いつもユーラシア大陸を西洋と東洋に分ける、という二分法の見方を改め、真ん中に共通の風土を持つ「中洋」という地帯を取り出した。東の中央アジアから西アジアを通って北アフリカのサハラに及ぶ「乾燥地帯」がそれである。インドネシアとマレーシアが熱帯モンスーンであるのを除けば、中洋はイスラム文化圏と重なる。

これは単に方角としての東西ではなく、自然界・地球環境と、人間界との交わりに注目する見方である。

風土という大地の生態系では、人類はその中の一員であり、動物・植物・バクテリアなど、他の生命との関係においてはじめて生きる。その風土の生態系の中で繰り広げられる生命と生命との間の相互作用のタイプを参考にして、人間の間の現に存在する関係と、また、あるべき関係を見透すことができる。そこでの人間の相互作用のパターンには、おおよそ次のものがある。

①相利共生

これは、お互いに利益（りやく）を与え合う、自利利他、互恵の関係であって、例として、ある種の大魚とそれにつきまとって口の中の虫を食べる小魚との関係がある。

人類社会、国家社会でこの関係が続けば、皆がしあわせになる。お互いにプラスの価値を与え合うからである。物の売り買いは「売ってよろこび買ってよろこぶ」であって、この相利共生の方法の一つである。売り買いは、グローバル市場として現代史の大きな川の流れを形成しているが、こうした自利利他の性質をもつからである。

②片利共生

これは、片側のみが相手を利する一方向的な利他の関係である。国際間の無償援助、福祉国家による弱者支援はその例である。寛大な親が、いつまでも臑囓りをするパラサイトシングル――結婚しない若者――を受けいれるというような関係もある。これはむしろ次に言う寄生か。

現代の言い方では、ボランティア、あるいは昔の言い方では宗教での布施、慈善、喜捨などと呼ばれるものは、歴史上、弱者やマイノリティを助け、人類の社会を潤いのあるものにし、平和に近づける働きをしてきた。

ここまでならば、歴史はあまり争いにはならないが、次の二つの関係は争いを生み出すことになる。

③寄生

これは、生命力の小さいほうが大きいもの、つまり宿主に依存して利益を得るという関係であって、大木にまといつく蔦や、枝に生える苔がそれである。寄生虫などは、おおむね宿主を害する。

戦後、世界各国での福祉国家が、なぜ限界に直面しているのかを、これは説明する。過剰な福祉が人々に甘えと依存の心を増長させると、国家財政の赤字が増えてくる。

人類は他人の懐に頼り過ぎるようになり、自分自身を貧しくさせる傾向があるようだ。歴史上、国家の衰弱は、国民の自己責任の意識が薄くなり、国家財政への寄生だけが増えることによる場合が多い。現代日本の国家改革の要点の一つがここにあるのではないか。人間の自立を促さない薄っぺらな愛とか助け合いは、長続きしない。

④捕食

これは、生命力の大きいものが小さいものを食うという関係であり、ライオンが羊を捕まえて食うなどである。江戸時代、徳川家康（一五四二～一六一六）は、なんと、「百姓は生かさぬように殺さぬように」といったそうだが、捕食は、武士階級が農民を搾り取り、農民が耐えられなくなって領地から逃げることに現れた。逃げることを逃散といった。依存心を生む過剰な扶助も、逆に搾取の激しい社会も、長続きしない。

国際関係では、いうならば、帝国が植民地を搾り取ることも捕食の一種である。現代では荒々しい帝国主義を行う国はない。歴史は、この面では少しだけ進歩したといえる。

⑤無関係

これは、異なる民族は異なる国家に纏めるとか、同じ国家内部でも別々の自治区とか共和国に住まわせる、というような民族政策に現れる。

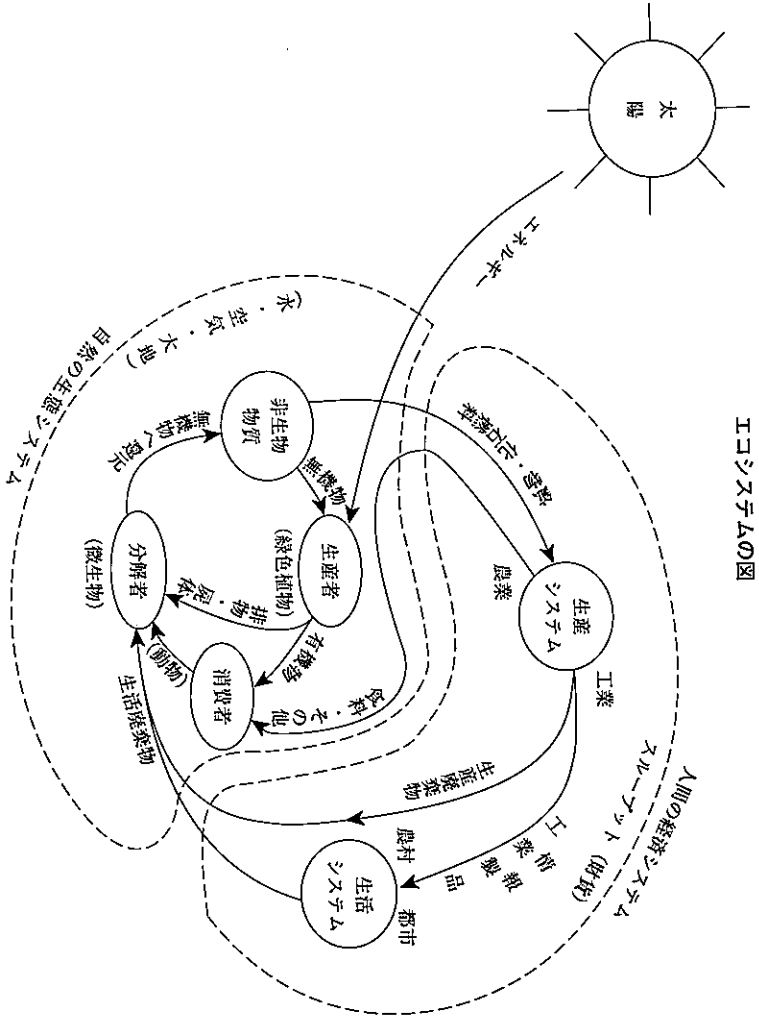
要するに、関係をなくすことによって、争いもなくすという方法である。人類の争いというものは、関係ができて、しかも利益を奪い合い、損害を与え合う時に発生する状態だからである。どうしても一緒にいるのが嫌な人は、最小限、相手を避ければよい、という次第である。

このエコシステムには、「食物連鎖」（フードチェーン、food chain）というものがあり、土や空気、水といった無機物から出発し、それを利用して植物が炭酸同化作用を行い、太陽光線を利用して炭水化物を製造する。そういう生物を生産者という。次に、その炭水化物を用いて、動物はタンパク質を造り、脂肪を合成する。これは二次的な生産でもある。

ただ、動物は所詮、消費者であり、植物が生産したものを消費する立場にある。その後、バクテリアというものが待っていて、これは分解還元者といい、植物と動物の食べ残しや糞や死体を水と空気と土に還し、熱エネルギーに変える働きをする（オダム『生態学』築地書館）。

このとき、このタテの関係では、草は牛に食べられ、牛の糞は草にとって栄養となるから、草と牛とは相利共生である。しかし、牛と馬と羊は、ヨコに並んで、草を奪い合うという競争の関係にある。人間の戦争がしばしば資源の争いであるのは、あたかも牛と馬と羊が、あるいは虎とライオンとヒョウが、ヨコの関係にあって同じ食い物を巡って取り合い争うのと似ている。人間はそれよりもっと愚かなのかもしれない。

この食物連鎖による循環と還元という流れが滞れば、生態系は狂い、環境破壊が生じる。国土の環境を破



エコシステムの図

壊して滅んだ国は少なくない。

いま中国大陸の北部、大黄河流域が水不足となり、あの大黄河が干上がるのではないかという危機感が高まっているらしい。アフリカのサハラ地域もそうである。過去に国家と人々が行った過剰な森林伐採や放牧が、その原因ではないかともいわれている。

このようなエコロジーの見方を採るならば、国際関係でも、一つの社会の中での争いでも、どの性質のものか分類できて、どのように取り組めばよいかが見えてくる。

(三) 歴史には、倫理道徳が不可欠である

人間のいのちは、先にも述べたように、男と女の間の遺伝子の結び付きから出発し、結合した卵子と精子が一つの細胞を成し、その細胞が分裂し増加して胎児となり、やがて子供として生まれる。別々の細胞から一つの生命が誕生する。

また、人間は誕生するとともに、一面では母親の無私の愛護のもとで育つが、他の兄弟姉妹の間、他の家の子供との間で、諍いも始める。仲良く遊ぶが諍いも起こす。それもいのちが育つときの姿である。それゆえ、ある範囲までの兄弟げんかは正常なものだ。家で兄弟げんかを訓練しておかないと、学校での苛めをうまくやり過ごせないことにもなる。争いというものは、いのちの共生にとって不可欠な運動であり訓練なのである。

共生と競争とは、コインの表と裏の関係にあるのであろう。

そして、競争が破局に至らないようにする防止装置があれば、人類の歴史を豊かにする。その防止装置を

工夫することが歴史の主役たちの課題となるのである。人類の歴史は核兵器を拡散させず使わせないようにする、生物兵器は禁止するなど、破局を防止する装置を工夫する歴史でもある。――ただ、核不拡散条約は全く不公平な条約であって、現在核を保有する大国の独占権や先有権を保護するだけで、少しも核兵器の削減に向かってはいない。

いや、「少数大国の独占のほうがかえって安全だ」という意見もある。

躾とか礼儀作法というものも、お互いの人間関係をスムーズにし、破局を防止する工夫なのではないか。お辞儀は、「体の言葉」(ボディランゲージ)なのであって、自分の頭を相手に差し出すことで、自分から相手に気を許し、相手を信頼し、無防備であることを表し、平和的な関係を期待する、というものではないか。

だから人類は実に古くから、善を求めて悪を避け、倫理道徳というものを築いてきている。その歴史は五千年より短くはないだろう。倫理道徳とは、争いを解決するための標準、あるいは共生のための精神と行動ルールを示すものであろう。

しかし、その倫理道徳の実際の運用は、たえず揺れ動いて来たが、その間に進歩もある。

「無限に報復せよ」――やられたらやり返せ。

「無限報復を止めよ」――「目には目を歯には歯を」までにとどめよ。

「敵を愛しなさい」――右の頬を打たれたら左の頬も出しなさい。

例えば、西暦二〇〇一年九月十一日、アメリカを襲った同時多発テロを国際世論は「犯罪」と認定した。

その世論はアメリカがリードして造り上げた。犯罪とする理由は二つとされた。その特徴は、

①国軍以外のものによる「不法」な暴力だ、

②軍人や国家要人のほか、「一般人」を巻き込んだものだ、

という点にある。

しかし、一般人を巻き込んだテロは、十八世紀のアメリカ独立戦争以前から起きていた。独立を宣言するより先に、十七世紀から欧州白人である入植者たちは、一般の原住民を、おそらく良心の呵責を少しも感じないで殺害していた。その記録は沢山残っている。南米大陸でインカ帝国を滅ぼしたスペイン人の暴力グループも、テロ集団であった。今は、そういうことをすれば「犯罪」と見なすのであろうが、当時は犯罪という意識などまったくなかったらしい。モラルや倫理の水準が低かった時代のことだ。

鮎の縄張り争いではないけれども、他人の住む土地に植民地を造るのは、他人という「いのち」が住んでいる空間を侵略することであり、他人のいのちの領域を奪うことである。いきおい、奪われるほうは抵抗し反撃しで、争いが生じる。

この意味で、人間は、「生存競争」を続ける。やさしい段階では競争、厳しくなれば闘争であり殺し合いである。これまで、人類の歴史ではその方法が、力づくから、売り買いや話し合いなど非暴力的なものへと、少々変化したが、少々だけである。

日本列島の開拓時代の状況を記録したものに各地の風土記がある。

風土記は、奈良・平安時代の日本列島の人々について、素朴であるが、先人が残してくれた貴重な記録である。記録したのは字が書けて学問のある大和朝廷側の役人か誰かであろうが、得難い歴史資料であり、『詩経國風』や『禮記』など古代中国（シナ大陸、Mainland China）の古典を想起させる。

その一つ、『常陸風土記』を繙くと、中央の大和から稲作民族が関東に下ってきて水辺に水田を開拓する。当時としては、まさに植民地造りであるが、先住民たちは、自分らの狩場や漁場が奪われるから、稲作民族が造った水田の水路や畦を壊す。

大和からやって来た人々は、原住民に向けて、「壊すと皆殺しにするぞ」というお触れを出す。

こうして争いが起きたのである。『常陸風土記』の一節を読むと、大要、次のように記録している。

継体天皇の御世のことである。箭括の氏の麻多智という者が人々を連れてやって来て、新田を開こうとした。地元の夜刀の神という者が土着民を集めて、それを妨害した。土着民は穴蔵に住んで、蛇や獣のような性質を持っていた。

麻多智は、土着民を平らげ、山口（上り口、山麓）に進んで行き、境界の印を表す梲を立てて、夜刀の神に告げていった。

「これから上は神の土地とし、これから下はわれわれの田とす。吾は、神の祝　神祭りをする者となりて、神を永代に敬い祭らん。乞い冀わくは、吾らに祟らず、恨まないことを。」

（以上、日本古典文学大系『風土記』岩波書店、二七ページ、訳文修正）

そのころ常陸の地に住んでいた先住民たちは、佐伯とか、国巣、土蜘蛛、夜都賀波岐などと称されてい

た。しかし、いのちの共生にとって、肝要なのは、外からの侵入者がついに「土着の神」を祭り、神の地域は先住民の狩場として侵略しないというように決めたということである。

南北アメリカ大陸の原住民を征服した白人植者たちは、はたしてこういう大事なことを行ったのか。自分たちの信ずるキリスト教こそが無上であって、先住民（インディアン）たちの信ずるところのものなど低級なもの、誤ったものと見下したのか。

なお、この貴重な風土記の記録者は、常陸国主の藤原宇合と、その下に仕えた万葉歌人で高橋蟲麿という人物だったという。

歴史が動く理由は、ここにある。人といういのちは、生きるためには、どうしても時間空間上の点と面を必要とし、点と面の奪い合いを引き起こすからであって、これはいのちのもつ宿命といえる。

しかし、われわれ人類の目的は、いかにして、平和的な方法でもって「共生」を実現するかにある。争いの側面を孕みながら、どうすれば争いの少ない社会を造ることができるか、その知恵と方法を明らかにするのが、歴史論の課題であろう。

ところが、歴史に見られるのは、強いものが弱いものを支配する、弱いものは強いものの支配に抵抗する、という面だけではない。もう一つ、後進のものが優れたものに、みずから進んで恭順し奉仕するという面もある。長い目で見れば、人類の歴史には、闘争抵抗史観だけでなく、反対の協調恭順史観も成り立つのである。むしろその面が優勢であろう。

われわれ人類の祖先は、悪い悪魔と善い神という配役を作ったが、人類自身の心に潜む正反対の性質を、それは象徴的に表現したのではないか。

古代東北の人々は、大和勢力に抵抗もしたが、抵抗ばかりではなかったろう。優秀な文明と文化をすすんで受容れたという面もあったに違いない。

坂上田村麻呂（七五八～八一一、蝦夷征伐、八〇一）の時代に、大和朝廷軍と戦ったアテルイというアイヌの長（おさ）が居り、その記録を見ると、アテルイはひどい目にあった。嘘をいって都に連れていかれ、殺されたという。「権力・暴力という人間集団の狂気により、東北古代が変質していく姿」を描いた、菊池恵一『北天の鬼神』（岩手日報社）は、アテルイが主人公である。

ただ、歴史には権力・暴力のみでなく、権威と愛という要因が働く側面も同時に存在することを忘れてはなるまい。

時と共に、やがて多くの東北人たちが大和朝廷側に恭順したようである。都からやってくる優れた人物と文物に進んで恭順した。その生命力を自分たちのところにも取り入れたいという希望をもっての恭順であっただろう。協調史観がいうように、人はより優れたものに結びつき、その恩恵に浴したいのではないか。それは、今の世界の留学生の行き先を見れば納得されよう。殆どの若者は先進国に行きたがる。アラブのようにアメリカ嫌いの国々でも、青年の留学希望先はアメリカが第一である。

われわれが、人命救助の美談に感動したり、宗教家や慈善家、現代でいえばボランティアの人々に感動するのはなぜか。歴史の流れの中に、協調と相互扶助の原理というものがあり、ずっと生きて働いているからではないか。

仁徳御陵（四三〇頃）や、秦の始皇帝陵、ピラミッドなどのような巨大遺跡の建設には、二面性がある。一方に、多くの人々が奴隷として無理矢理、強制され働かされたという側面もあるが、また大衆に仕事を

与える公共事業の一種でもあり、さらに、その偉大な建設に奉仕することが自分たちの救いにつながる、というような宗教的意識も、人民の心の内に働いてきたのではないか。

(四) 歴史には、時間と空間でのつながりがある

歴史とは、先人が風土という自然環境の舞台の上で、これまでに経験してきた、いのちの実験の積分――積み重ね――であって、喜劇や悲劇というドラマの系列を含むものである。なぜ系列かといえば、現在の物事のうち何一つとして、過去の要因から無関係に現れてくるものはなく、すべて「つながり」の中にあるからである。歴史には「無からの創造」は起らない。

ウィーン育ちのピーター・ドラッカー先生（一九〇九～）は『断絶の時代』（ダイヤモンド社）と言い、堺屋太一さん（一九三五～）は『油断』（日本経済新聞社）で石油ショックを描き、歴史の糸の切断ということを力説したが、実は一切はつながりの中にある。つながりの中の特定の局面が、人々の目に断と映るだけなのではないか。

歴史のつながりは、まず**時間軸**で働いている。かの『方丈記』に「行く川の流れは絶えずして……」といわれるように、いのちはつながり、時とともに流れていく。一つひとつのいのちは時間の流れの中に生きる。そして、長い時を隔てて作用し合うのである。

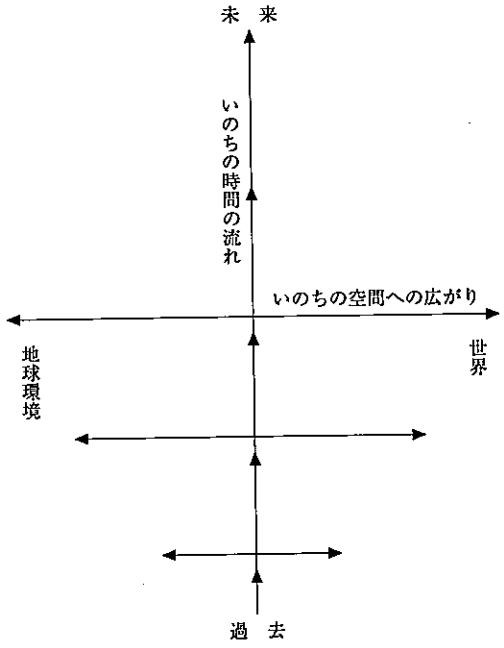
歴史のつながりはまた、**空間軸**でも働いている。いのちのつながりは空間へと広がる。人類のいのちは地球上の空間へと広がっていく。正倉院の御物にみるように、ギリシアという空間的に何千キロも遠い地域の人々の心とその産物が、シルクロードを通って極東の日本列島へと伝わった。

逆に、日本の焼物と、支那（チャイナ・China）の景徳鎮のそれは、共にヨーロッパに影響を与え、ドイツでマイセンの陶磁器（チャイナ）となり、日本画の手法がフランスで印象派の画法となったという。

先にも触れた二〇〇一年の「テロ」事件をこの時空という角度から見てみよう。現時点ですでに世界史上の事件になってしまった感があるが、誰も予想だにしなかった時に、ニューヨークはマンハッタン島の世界貿易センターが、テログループによって攻撃された。わずか二本のビルが倒壊しただけで世界中に衝撃が走り、多くの人が震えあがり、航空業界をはじめ世界の経済が大混乱し、先進国の不況が一層、深刻化した。そして、イスラムについての見方が世界の人々の心において、一大変化をもたらした。

ついでに、イスラムのことを日本人は余り知らないが、手頃なイスラム理解のための本を示しておくと、山内昌之『文明論としてのイスラーム』角川選書、特に二三ページ以下。このほか、『コーラン』上、中、下、岩波文庫。大権

時間の流れと空間への広がり―その1―



(注) 後に掲げる 2～4 の図と重ね合わせてみられたい。

威の学者による訳業とはいえ、これはムハンマドの言葉としては、訳文が少々汚なすぎる。片倉もと子『イスラームの日常世界』岩波新書、黒田壽郎『イスラームの心』中公新書、板垣雄三『「対テロ戦争」とイスラム世界』岩波新書、藤原和彦『イスラム過激原理主義』中公新書、などが手頃な案内となる。

人類社会とはまさに、すべてが相互に作用し合う一つの情報ネットワーク社会である。情報とは、いのちといのちとの間で取り引きされ伝達されるものであって、人類社会は情報の織物といえる。

織物は一個所でも「ほつれ」があると値が下がるように、テロというほつれは、世界秩序という人類のいのちの織物の値を引き下げた。株価は暴落した。これまで歴史上、戦争というものは他国で起これば景気を良くしてきたが、今回はテロによる「戦争景気」は訪れていない。全世界が直接間接、戦場となるからである。人々は、外国旅行を戦場に出かけるもののように受けとり、怯えてキャンセルした。

歴史は、環境、生命、情報という三次元で変化しているのだが、その内、情報ネットが今回は攻撃されたのである。戦争の形が変り、その場所が全世界の情報セキュリティのネットワークでつながり、どこにも無関係で安全な国はなくなったわけである。――

そして、二十一世紀に入っては、このほかＳＡＲＳ、ＢＳＥ、鶏インフルエンザなど生命系のレベルの撹乱も発生している。

テロが、国境を越えて外国人によって行われること自体は昔からあることであって、何ら珍しいことではない。だが、今は情報化時代であるだけに、影響が遥かに広く速やかに拡大しているのである。

情報革命の時代には、国境というものの役目が手薄になる。情報は国境を簡単に飛び越す。人間も、その犯罪も、そのように移動しはじめる。――しかし、だからこそ、逆説的に、国防や治安などの安全保障に関

しては、かえって国境の意味が重要となるのではないか。

いのちというものは、長い時間と遠い空間距離を越えて作用し合う。その例が中国の古典、司馬遷『史記』に出てくる。万里の長城のはるか北方に勢力を誇っていた匈奴と、長安（西安の地）に都していた漢族との闘ぎ合いの物語がそれである。

この話は、遠い距離を越えていのちが作用し合うというだけでなく、二千年の時間を隔て海峡を越えて日本にも伝えられ、江戸時代や現代の日本人の心にも、切々と訴えかけるものがある。

いのちは、二千年の時を乗り越えて響き合う。そして、この響き合いは情報の響き合いにほかならぬ。

中国漢代の将軍・蘇武（前一四〇?～前六〇）が、十九年間も匈奴の地（中央アジア）に囚われの身となりながら、頑として節を曲げず、ついに漢の都長安に帰還を許され、不名誉を濯いだという話である。節というのは、竹の節（ふし）ではなく、皇帝の使者たる者の徴としての割符、手形を指す。

この蘇武は、「忠節」を全うする人物の手本として、後の世に誉めたたえられた。かたや同時代の将軍・李陵（?～前七二）が、匈奴に囚われの身となり、生涯、漢土に還らず――帰還を許されず――匈奴の地にとどまり、そこで没したのと比べられる。蘇武と李陵とのあいだには、「河梁の別れ」という悲しい物語があったという。

陵、詩を以て別れに贈りて曰く
手を携えて河梁に上れば、
游子、暮れに何くにか之く（漢書、李陵傳）

だがしかし、公平のために言えば、李陵については中島敦の名作『李陵』（筑摩書房）があって、李陵も李陵なりに苦しんだのだ、ということが実に印象深く描かれている。

歴史上の人物は、単純に一つの観点だけで評価してはなるまい。人物の他の価値や側面を抹消することになりかねないから、気をつけねばならぬ。

どんな人物も、この世に生まれ出でて人類の歴史に登場するかぎり、何らかの意味を担っているに相違ない。その担う意味において、蘇武が貴く李陵は卑しい、ということは一概には断定できまい。一切の物、事、人には、各々、かけがえのない意味が内在するのではないか。

東洋史の碩学、宮崎市定先生は、その司馬遷（前一四五～八六頃）について以下のように語っておられる。

『史記』の著者、司馬遷の生卒年は判明しない。普通に漢の景帝の中元五年（前一四五年）に生まれ、次の武帝の時代を生き、郎中、大史令等の職につき、親友である将軍李陵の匈奴への投降事件に連坐して宮刑に処せられ、その後、中書令に任ぜられ、武帝の死と前後して、その後元二年（前八七年）頃に死んだと思われる。

その著、『史記』は父司馬談が既に修史の志があったのを嗣ぎ、苦心して大成したものである。

（宮崎市定『史記を語る』岩波文庫、二〇～二一ページ、ルビ追加）

この本は、歴史というものがどのように編纂され、記録され、何を物語り、如何なる意味を後人に伝えんとするかについて、学ぶところ多き思索を示されている。歴史論として是非ともお薦めしたい名著である。

さきの李陵には、有名な事件の話が残っている。その親友、司馬遷とのかかわりである。

李が匈奴に捕らえられ匈奴の王の臣下となったことに腹を立てた漢の武帝が、李の一族を皆殺しにしようとした。そのとき、友人として司馬遷が李を強く弁護したので、武帝が司馬遷に対し、宮刑――男性の象徴である金の玉を抜くという刑罰――を加えた事件のことである。

昔から、刑罰というものには、死刑を極限として随分と「むごい」ものがあったようだ。人類の歴史には、一方で愛を説き愛を実行する例に事欠かないが、他方で人類は、よくもまあ、と思うほど残忍な性質を発揮して来た。

親友とは、「友の為に命を捧げる人」のことだという。すなわち、友が不幸にして恥辱にまみれ災厄に出合ったとき、みずからのいのちを懸けてその友の名誉を回復しようとする人のことである、と。

そして、司馬遷の発奮が物語るように、苦難というものは、その受け止め方次第で、その後の人生を左右する。人生をダメにすることもあるし、かえって心を奮い立たせ、人生を完成させる働きもする。完成とは、書物を書いて遺すとか、事業を遺すとか、いずれであれ、いのちの価値を実現することである。それは、努力次第で誰にでもなし得ることである。

そして、「影は曲がれる物のために直くせず」（管子）であって、物が曲がれば影も曲がる。よい結果を得ようとすれば、よい行いを為さねばならない、といわれるのである。

ともかく、人物の歴史的意味は、安易に一つの尺度でもって比べられないのではないか。いわんや、ある特定の歴史段階の文化と価値観だけに基づいた評価には、限界があろう。評価には、異なる観点からのそれ

を許す寛大さ、柔軟さが求められるのではないか。

しかも、時代が移り、所と文化が移ると、人物への評価も変る。そしてその変化した評価もまた、再び変っていく可能性があるのである。

歴史上の人物の理解や評価は、一筋縄ではいかない。

最後まで見届けないと人の価値は分からないよ、ということについて、イソップ物語にもこういう小話がある。イソップとは、ギリシア名アイソポス（?～前五六四頃）のこと。物語は一四七九年、その最初の印刷本が出た。

ロバとラバが一緒に荷物を運んで歩いていた。ロバは彼らの荷物が等しいのを見て憤慨し、「ラバは自分の二倍の食べ物をもらっているのに、運んでいる荷物は自分より多くない」と不平をいった。しかし、彼らが少し進んだとき、ロバ引きはロバがもうそれ以上歩くことができなくなっているのに気がついて、積み荷の一部を取ってラバの上に載せた。

さらにしばらく行ったとき、ロバがいっそう疲れたのを見て、ロバ引きはその荷物のさらに一部を取り除き、最後には残りの全部を取り去って、ロバからラバの上に移した。このとき、ラバはこの道連れのロバの方に目をやりながらいった。「ロバ君、わしが二倍の食べ物の割り当てに値すると評価されていることは、正しいと思わないかね」

われわれもまた、初めではなく終わりによって、めいめいの価値を判断しなければならない。

（塚崎幹夫訳『新版イソップ寓話集』中公文庫、一一五～一一六ページ、一部改変）

蓋棺事定、人の価値は棺を蓋ってから定まるといわれる。後世の人々は、同一の人物に対しても、時の流れとともに評価を変え、尊敬あるいは誹謗を捧げる。歴史の出来事は、単味ではなく、隠し味も効いて豊饒であるということなのであろう。

歴史に登場する人物は、いろいろと異なった生き方の先例をわれわれに垣間見せてくれる。その意味で、歴史というものは時と所で、多様性に富んでいる。歴史は、時代を超えるだけでなく、国境をも越え、文化をも越えて、われわれ後生にさまざまな利益を及ぼす。

時間空間ごとに異なる価値を表現して多様性を孕みながら、いつでもどこでも通じるいのちの普遍的な味わいを秘めているものを、偉大な古典という。

（五）歴史は、いのちの複雑系である

では、いのちのつながりというとき、その内実は何か。それはまず、生物的な生命のレベルでのつながりであり、いのちの本となる遺伝子情報のつながりである。

今現在に生きるわれわれ個人のいのちについて言えば、二〇代前に溯ると一〇四万人を上回る膨大な数の祖先が横に並ぶ。そうすると、二〇代の期間に現れた祖先の数の総計は、104万×20÷2で計算され、なんと一千万人余に達する。

われわれ一人ひとりは、その人たちから受け継いだ膨大な生物遺伝子の果実である。

しかし、われわれは、生物遺伝子（ジーン、gene）に加えて、知識、宗教、科学、道徳、教育のような文化の遺伝子（ミーム、meme）というものでもって育てられた精華であり、文化のレベルで、文字とそれが表わす思想を受け継いでいる。

漢字を例に取ろう。漢字とは漢族の言語である漢語の文字記号である。それは中国大陸（東アジア大陸）で三千年以上の昔から長い時間をかけて発達して来た文字記号であるが、ごく少数の「国字」という日本製の文字を除いて、われわれ日本人もその多大の恩恵に浴している。私もこのノートを綴りながら、漢和辞典を手元に置いている。

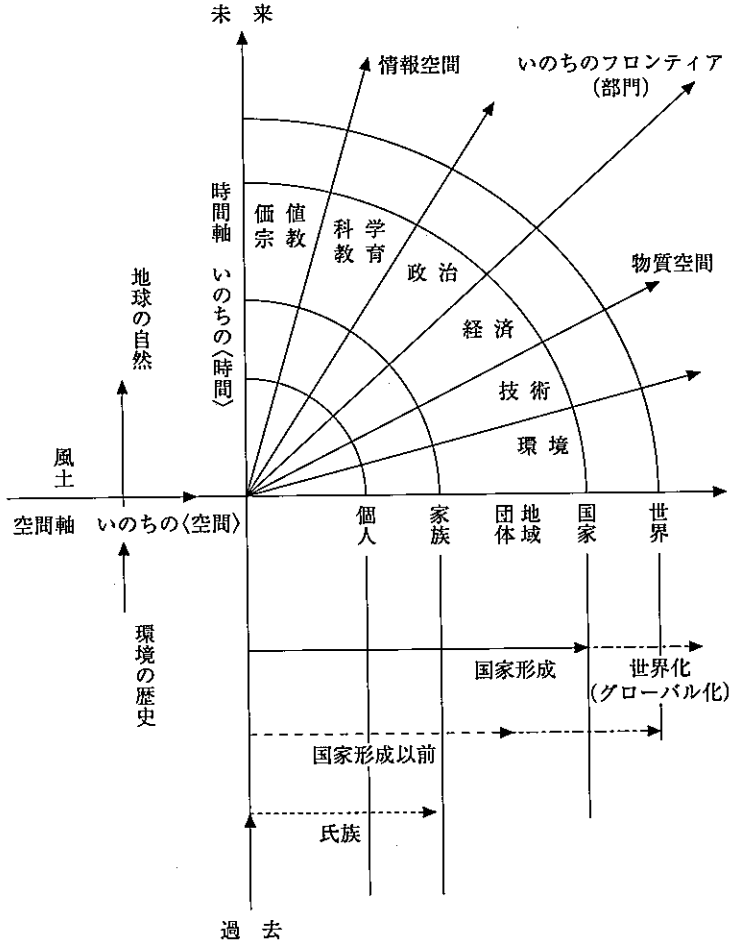
文字は言葉の記号であり、人間はいつも記号によって物事を考え、記号は思想や意味を運ぶから、わが祖先たちは、『古事記』（七一二）、『日本書紀』（七二〇）、『万葉集』（七七〇頃）を漢字を使って編集したが、その時代に、文字記号とともに中国大陸で発達した哲学や芸術などを輸入したことになる。その恩恵たるや測り知れまい。

しかし、日本の先人は、漢字という素材は輸入したが、発明と加工の才に長けていたので、その漢字を基に、ひらがなとカタカナを考案した。

これは決して簡単なことではない。今日、新しい文字体系を造ってみようとすると、至難のわざである。豊かな表現力を秘めた文字を造ることは、実に偉大な知恵と創造力の賜物である。現代の外来語の氾濫を、われわれはカタカナ表記で受け止めている。これも偉大な工夫である。

工夫とは「結びつけ」であり、イノベーション（革新）である。日本人は、漢語の義と理をくっつけて

時間の流れと空間への広がり—その2—



「義理」とし、仁と義を組み合わせて「仁義」とし、日本流の思想を表現するものをつくったという（高島俊夫『漢字と日本人』文春新書、二六ページ）。

高島さんのこの本は、日本人が今使っている日本語の中で、漢字という文字が日本語にどれほど「豊か」さを与えたか、しかしそれとともに少なからぬ「混乱」や「むつかしさ」や「制限」をも加えてきた、という事情を明かにして餘すところがない。漢字について、目からウロコが落ちるという実感を与えてくれる。

日本文化は、このように積極的な創造力を発揮した文化である。これをわれわれは大いに誇ってよい。

お隣の朝鮮半島では、人工的なハングル文字を発明した（一四四三頃）。これも素晴しい工夫である。しかし半島の人々は、漢字万能の時代感覚からして漢字を崇拝し、せっかくのハングルはしばらく軽蔑していて使わなかった。三十年間の日本時代における日本語の公用語化も影響した。ハングルを本格的に使うようになったのは、やっと第二次大戦後のことである。

ともかく、現代は、文字一つ取ってみても、交流がグローバルな範囲に広がっている。われわれはローマ字も、漢数字も、アラビア数字も、ギリシア文字もみな使う。

人類のいのちのつながりが、それだけ縦横無尽のネットワークになりつつあるわけだ。

ところで、歴史というものは、一本の糸というより、複数の糸から織られていて、いうなれば一枚の布である。つながりは布の形をとる。そして、それぞれの糸が互いに触れ合い結び合う。

そのいのちの糸の系列には、次のようなものがある。

①歴史には、個人の歴史、つまり人生記が含まれ、人物の伝記という形で記録される。

②歴史には、古くは氏族、一族、現代では家族の歴史があり、何々家の歴史とか家系という形で記録される。

③歴史には、藩、旧家、老舗、会社など、団体組織の歴史を含む。思想や宗教や教育方面の団体の歴史もある。趣味や芸事の団体の歴史もある。それらは団体史として記録される。

④歴史には、民族、国民、国家の栄枯盛衰を含み、国史という形で記録される。

⑤歴史には、人間のさまざまな活動分野ごとの歴史もある。軍事、政治、経済、科学、学問、芸術、宗教などの部門史である。

⑥歴史には、風土・環境という自然界の舞台があって、その上で文明と文化が総合される。それは人類の世界史として理解されるものである。

こうしたいのちの系列からなる森羅万象は、重々無尽につながり合っており、一つとして他と無関係に生じるものはあり得ない。それゆえ、一切が因となり、縁となり、果となって、あたかも織物の糸のように絡み合っている。

人類のいのちは、

一、風土という環境の上で展開する。

二、過去から未来へと時間の流れの中で移ろう。

三、個人から世界へと空間に広がって交流する。

四、情報部門と物質部門という活動に現れる。

歴史とは、このように時間と空間の座標軸を枠組みとし、風土環境と、道路や建物や車のような人工物質システム、そして政治、経済、宗教、科学、技術、教育、医療などさまざまな活動部門からなる。われわ

れ人類のいのちの姿は、まさしく多次元的な複雑系といえよう。われわれは、この複雑系をいかにして解きほぐすか、またこれから途切れることなく、いかにして複雑系の布を紡いでいくか。（人類が歴史を作るとき、宇宙自然について探求する哲学と、科学と、科学の応用である技術が、宗教と共に深甚の働きを演じる。この点は、伊東俊太郎ほか『思想史のなかの科学』平凡社ライブラリー、を参照。）

二、歴史には、素・真・心の三実がある

（一）歴史は、無限の素実から出発する

考古学では発掘を行う。発掘によって過去の出来事を探索することは、事実発見の営みである。だが、いったい事実とは何であろうか。例えば、どこそこに「水田跡」が見付かった、と報道される。水田造りをした経験のある人なら誰でも知っているが、その発掘で分かることなど、全く僅かでしかない。誰が耕やしていたのか。稲はどんな品種であったのか。収穫高は、租税は、等々は不明のままである。

日本列島上、古代の人々が各地方でどのような暮らしを送っていたかを知るには、各地の村史、町史、市史といったものを読めばよい。

例えば、秋田県平鹿郡の出羽山地にある「山内村」の村史を友人・佐々木周一郎氏が送って呉れた。それを繙くと、縄文時代の遺跡が驚くほど数多く発掘されており、西日本の同様の村史と比較すれば「稲作」の歴史はかなり遅れるが、代りに山野の動植物や川の魚などについての豊かな恵みに基づく生活をうかがい知ることができる（『山内村史』上巻、第一章）。

それによれば、焼畑農耕――カノ、鹿野畑の耕作――と呼ばれた定着農耕の役割が重要であったことが、作業仮説としてであるが、推測されている（同、八〇ページ以下）。

文献記録の欠ける時代についての真実の解明は、発掘された遺物の積み重ねを媒介とする推定が頼りである。

歴史の事実と一口にいうが、それは一枚の布だけからできているのではない。少なくとも次のような三枚の布が、歴史には重なりあっている。

①まず、出来事そのもの（events, Geschichte）。

②次に、それらを整理し編集し記録したもの（history）。

③さらに、歴史の物語（story）。

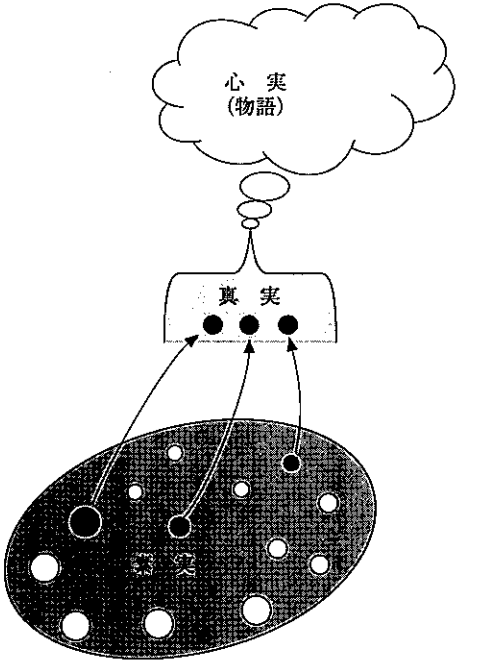
歴史の事実というものは、こうした三つの層からなっている。まず、記録以前の無限の素実がある。次に、そこから掬い取られ、選択され、記録された有限の事実から構成される真実がある。さらに幻想や信仰などをも含んで描かれる心理像がある。この心理像を私は心実と名付けたい。

現実の歴史問題では、こうした素実、真実、心実という三つの実の要因すなわち三実が微妙に重なり合うのではないか。

民族学の泰斗、宮本常一博士は、次のように述べておられる。

> その土地に住んでいる人たちは、自分たちの住んでいる土地のことは何でも知っているように思い込みがちになる。しかし実際には何ほども知っていないものである。自分と、自分をめぐる少数の人びと

歴史の三実―素実・真実・心実―



の、それも時間的には過去数十年のこと位しか記憶していない場合が多い。そればかりでない。よく歩きよく見ているように思っても、自分の村の内というものは意外なほど知っていないもので、つぶさに歩いてみて、こういうところもあったのかと思うことが多い。

ところが、一人一人の知識や記憶は断片的であっても、みんなの持っている知識をよせあつめ、つぎあわせ、また前後にならべていき、お互いの記憶の違いなどを訂正していくと、そこにおのずからその地方のすぎこし方のさまが明らかになって来ることが多い。

その上、古いころからの書きのこしたものなどがあって、この記憶と、民衆の間に伝えられて来た口碑や習俗などを重ね合わせて見ると、その地域に生きて来た人の姿や、それを支配した人の姿、その地域といろいろのことで交流のあった他の地域との関係も明らかになる。そしてそれが長い年月の間にどのように変化して来たかが分かってくると、現在の時点に立たされているわれわれが今後どう生きてゆけばよいかという暗示も得られて来る。

（沖本常吉編『日原町史』島根県日原町、昭和五十五年再版、下巻、跋文、ルビ追加）

編者の沖本氏は、津和野町出身、民俗学会会員。もと文藝春秋社勤務の方で、帰郷。津和野町史も編纂。日原町は、天領であり、周囲の津和野藩の地域と異なり、明治維新の際に廃仏毀釈運動が徹底せず、神社が統合されることがなかったなど、多くの古い歴史資料が残る貴重な地域である。宮本博士のこの文章は、歴史の事実というものについて、素実、真実、心実の関係を総合的に位置付けている。

私は近年、つとめて地方史を読んでいる。地方史は、個人の伝記と国史との間にあって、個々の人物の私的な素材ほどミクロでもなく、マクロの国史にも載らない、人間の集団としての人々の息遣いを映す。私は、歴史の理解においては、個人伝記、国史のほかに、地方史に光を当てる必要があると強く感じる。

歴史にも、哲学者イマニュエル・カント（一七二四～一八〇四）が力説した「物自体」（Ding an sich）とは何か、それをわれわれはつかめるかどうか、という問題がある。

哲学にも、そして科学にも、われわれの毎日の暮しの中にも、「物自体」はつかまえられるのかという問題がある。

まず、何をもって「見る対象」とするかである。例えば、夕焼けが美しいと見る。しかし、犬を連れているとき、犬は夕焼けをどのように見ているのであろうか。私自身の経験では、そのとき犬は、夕焼けなどよりも、鼻をヒクヒクさせて、主に何かの匂いの方に注意を向けているようだ。

われわれ人間は、夕焼け雲を見ているときには、ややもすると空気がつくる景色の一部分だけに見とれて、湿度とか風などの他の要素は、見逃しているのではないか。目を通じて見ることは感覚の中で絶大な働きを占めるが、かえってそれにとらわれる。

考古学の発掘では、過去の土器や記録文書に関心をもって発掘を行うときには、大量の土を掘っても、捨ててしまう。しかし、古代の人が、どんな成分の土にどんな肥料を施して、どんな作物を作っていたのかを調べるときには、その土の方にこそ、注目するのである。

われわれ人類が何かを見ているとしても、それはわれわれに「関心」(interest) のある部分だけを、しかもわれわれに可能な「見方や感じ方」の方法でもって、観ているだけではないか。関心のないところ、可能でない方法の領域は、無視しているのではないか。

犬は犬で、われわれ人類とは異なった見方を取っているのであろう。これは私の想像でしかないのであるけれど、犬を連れて散歩すると、犬は嗅覚という手段を人間よりもはるかに鋭く使って、物を確認していることだけは確かである。

何が見えるかは、見る者の関心とともに、どんな「観測手段」を使うかによっても、大いに左右される。これは、物理学では不確定性原理（ハイゼンベルグ、一九〇一～一九七六）の問題である。つまり、物をつかまえようとするときに使う道具が、その物を動かしてしまうこと、またその道具の違いによって、得られる情

報が変化する、ということである。この道具の発展の歴史が、科学の歴史を造り出してきた。

まだ肉眼だけで望遠鏡がなかった時代には、子供の目に見える月には、ウサギが棲んでいた。幼い子供は、親が背伸びをすれば、物干し竿が月まで届くと思って、月を取ってくれ、と親にせがんだ。

イタリアのガリレオ・ガリレイ（一五六四～一六四二）は、自分で望遠鏡を工夫して、普通の人類の肉眼よりずっとよく見えるようになった月を観測した。今では、子供でも月にアバタを見、アバタに見えるのはクレーターらしいという。もはや、ウサギなどどこにもいない、と子供にすら分かってしまった。物干し竿は短くて月には届かないということを、小さな子供がとうに知っている。

人類の「月観」のこうした変化（進化？）は、ひとえに望遠鏡という観測手段の発達のお陰なのである。新しい手段が発明されると、それまでの手段は棄てられる。こうして、物を観るときに使う手段によって、何が見えるかが違ってくる。現代では、電波を使った望遠鏡で宇宙を観測するから、われわれはガリレオの時代の宇宙とは相当異なった宇宙の姿を見ていることになる。

ただ、犬は昔も今も同じ犬眼を使い、望遠鏡など使わないから、二〇代前の犬も、今に生きるその犬の子孫も、同じ月の同じ姿を見ていることであろう。

ケネス・ボールディング（一九一〇～一九九三）というアメリカの学者は、独特の知の進化論を唱えてこう言った。われわれ人類は、何かしら無限に多様で深く広い宇宙について、今尚、貧弱な観測手段を通じて、ほんの少しだけの情報を手に入れているにすぎない。宇宙について何かが見えると思い込み、宇宙イメージを作り上げているだけである、と（長尾史郎訳『地球社会どこへ行く』上下巻、講談社学術文庫）。

人類の歴史というものも、そういう「つかまえ所が無限にある物自体」なのであり、見る道具によって見

え方が変わってくる。今では、遺伝子のつながりを辿る遺伝子歴史学というようなものさえ発展してきた。この分野もまた歴史（学）の一部なのである。

（二）歴史観とは、無限の事実を整理する物差しである

無限の事実はいきなり掴むことはできないから、いうなれば、同じ釣りでも、私は鯛に注目して獲り方を選ぶ、いや私は秋刀魚を、私は鰯を、私は蟹を、というように自分が注目する魚だけを選び、他は外道といって無視してしまうか、釣れても棄てる。歴史観とは、魚を選んで獲るための網であり、方法であり、物差しであるといえよう。

だから、歴史には、例えば以下のように、いろいろな歴史観があり得ることになる。

①風土決定史観

広大な中国大陸では、古来「南船北馬」といわれる。歴史は、地球の自然界と人類とのあいだの相互作用の移り変わりであり、特に地球の自然生態系に働きかける物造り――衣食住――の舞台である風土によって動いて行く。これは基本的に、自然界が人類に一方的に善を恵んでくれる関係に注目した歴史観である。昔、マルクス主義史観の華やかなりし頃には、人類の創造性を低く位置付け過ぎるとの批判を込めて、「地理的唯物論」だという言い方もされた。

風土とは、天と地と生命系の統一されたシステムであり、人類生存の基盤であって、歴史の流れを根本において決定するといえる。

この点、和辻哲郎『風土』（岩波書店）、先に紹介した梅棹忠夫『文明の生態史観』（中公叢書）はつとに有名である。また松本健一『砂の文明・石の文明・泥の文明』（PHP新書）は最近の注目すべき提言である。そして、風土といえば陸地ばかりと思いがちだが、そうした大陸史観のみでなく、海に注目した川勝平太『文明の海洋史観』（中央公論新社）は貴重。さらに風土を地球全体のシステムに拡大し、人類史をとらえなおすスケールの大きな歴史観が、科学の背景をもって提案されてきた。松井孝典『一万年目の人間圏』（WAC）が手頃な手引きとなる。

日本列島の縄文時代――炭素同位元素を使う年代測定法は、日本の弥生時代を紀元前に大幅に溯らせるようだ――には稲作はあまり普及していなかったというが、先人たちは稲以外の穀物と、豊かな山野の動植物を利用していた。弥生時代に本格的に稲を作るようになると、灌漑水のあるなしによって人々の社会の作り方に一大変化が訪れた。

現代になって穀物の貿易が盛んとなり、また石油エネルギーを使う時代ともなれば、人口が爆発的に増加し、自動車と機械も激増して、環境破壊を生み出す。無限と思われた地球上でのフロンティアの開拓から、有限の宇宙船地球号の内部での共生へ、というように歴史観が決定的に変化した。

②宗教決定史観

宗教は、「心実」として人類が生み出した「精神という風土」の核心である。歴史は、宗教が示した方向に動いているとさえいうことができる。例えば、人類は神の心に反する行為を積み重ねて堕落を続け、その極に至ると、最後の審判がやってくるという（『聖書』や『コーラン』）。歴史は進歩に向かっている、そして同

色々な歴史観

決定の因子と方法 ＼ 相互作用の種類	相利共生	片利共生	寄生	捕食	無関係
風土決定史観	風土が面積、資源、気候などに厳しい制約のある地域では、極北のエスキモー、砂漠の民、熱帯雨林の民のように、小人口でこじんまりと相互扶助する相利共生システムで安定する。風土と人とのあいだに科学技術をいれると科学技術史観ができあがる。				
宗教決定史観	宗教はその強力なタブーが民族や部族などの集団を団結させ生存力を高めるが、宗教専門職の支配が一般住民の捕食搾取に傾くと宗教維持のコストが嵩み、集団の生存に害毒を与える。宗教には、プラスの役割とマイナスの役割のバランスが重要である。				
市場交易史観	売り買いという形の交易は、弱肉強食となり競争相手を滅ぼすが、売り手と買い手とは相互に利する「お客様は神様」という関係を含み、利己心が適度に活用され、世界に広がる。売り買いは人間の利己心と利他心の双方と結び付くことができる。				
唯物史観	人類の社会には、生きるための手段の所有により、階級集団が存在するから、唯物史観は、ある程度の歴史説明力を有する。そのマルクス主義は採らないとしても、この種の歴史観の存在意義を完全否定することはできない。階級は経済的利害だけでなく知識その他によっても生じる。				
情報史観	人類の歴史を、物質の獲得のみが決めるとするのではなく、情報の生産から通信、消費に至るまでの活動を決めると考える。これは人類の宗教を含めた精神活動を「情報活動」と考えるものである。人類社会には、もちろん情報をめぐる階級闘争というものも発生するであろう。				
相互扶助史観	すべてのいのちは孤立しては生存できない。人類といういのち集団の歴史は、階級闘争よりは相互扶助を基本とする。相互扶助の方式には、相手を厳しく排除する競争から、緩い競争まである。ただ、競争と見えるものにも扶助が隠されていることに注意したい。				
歴史因果律論	善因善果、悪因悪果という善悪史観は、単純には成り立たないが、長い目で見れば、人間の行為である因とその結果のあいだに縁という環境因子を加えて歴史を善悪因果のからみ合いとみなす。この史観では、因と縁に何を持ち出すかが大切である。				

(注)　現実の歴史を説明する際には、史観の種類はどれか一つというより、幾つかのものを結び付けて使うべきであり、どれか一つに因われるのは、歴史観を強度のドグマとして、イデオロギー化するものであって、歴史説明の有効性を失わせるのではないか。

時に堕落に向かっている、その進歩と堕落の矛盾の極に至って社会に革命が起こると見る（マルクス主義の歴史論）。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、そして儒教、道教、ヒンドゥー教などにより、近代社会の出来方が違ってきたというマックス・ヴェーバー（一八六四～一九二〇）の説は、支持者が少なくない。

中国儒教には易姓革命といい、革命を是認する歴史観があって、皇帝や支配者は天命によってその位につくが、その行うことが天の命ずるところに違背してくると、その地位から追われ、世の中が変わると考えた。

仏教でも、ブッダ（前四六三～前三八三頃、あるいは前五六六～前四八六の説あり）の死後千年から千五百年経つと、末法の世になると説いた（『法華経』などに見る末法思想）。日本では、西暦一〇五二年から末法の世であると考えられ、人々はまじめに、そのように受け取った。鎌倉時代に活躍した日蓮上人の熱烈な言動は、その末法思想に由来する。

この宗教史観は、生態系におけるいのちの相互作用の中で、マックス・ヴェーバーのいわゆる「救いという財」（Heilsgüter 救済財）がどのように与えられ、どのように変化するか、という角度から歴史をとらえる立場である。

いつ頃、どのような救い主や神や仏が、人類社会にお出ましになり、恵みをもたらされるか、を教えるものである。

世界的な宗教は、世界的な規模での歴史観を心実として人々に提供し、人々の心を衝き動かし、われわれ各自の人生を導く。これは、神仏が、人間に対して善を一方的に無償で贈与して下さるという関係であり、

生態系のいのちの相互関係でいえば、片利共生を強調する歴史観といえる。

③市場交易史観

これは、人類の歴史は市場での欲得づくの物の売り買いという交易によって決まって行く、人々は売ってよろこび買ってよろこぶ、グローバル化はよろこびの拡大を示しているのではないか、という歴史観である。

そうすると、国家というものは、市場での円滑な取引を保護するための仕組みにほかならないのであり、市場の取引が発展すれば、それに応じて改革されるべきものである、ということになる。

現代の国家改革とは、地球全体に広がる市場化に合わせるための、国家の法律や行政の改革にほかならないのである。国家の作り方をどう改革するかは、市場が何を必要とするかを考えれば明らかになる、というわけである。

市場は、生態系におけるいのちの相互作用のパターンからすれば、「相利共生」の人間関係であり、うまく行けばお互いに善を与え合い、満足を相互に提供し合う仕組みである。だからこそ、市場はますます普及し、地球全体へと普及するのである。売り買いという市場システムは、世界平和を増進させる好ましい発明品である。世界史は市場拡大の歴史だといってもよい。

そこで国家は、自由競争の条件づくりに徹し、政府を出来るだけ縮小させ、他のことはしなくてよい、国家の役割として欠かせないのは、専ら国防と治安だけである、という哲学が優勢となる。

④唯物史観

しかし、人類史については、これと正反対の「マニフェスト」(manifesto) が提出されて、多大の影響を与えてきた。曰く、「人類の歴史は階級闘争の歴史である」と（マルクスとエンゲルス『共産党宣言』、岩波文庫に訳あり）。対等な者同士の売り買いというより、強い者と弱い者、支配する者と支配される者、という二つの階級のあいだの生きるための決死の戦いが、人類の歴史を作ると考えるのである。

争いとは、「持てる者」（有産者）と「持たざる者」（無産者）との階級間の争いである。持てる者は、世の中のそれぞれの時代に、主要な生産手段、つまり土地や、機械などの資本財や、金融、知識・情報などを所有して生産を支配し、自分たちの地位にしがみつく。

昔の農業社会では地主と農業労働者や小作とのあいだの、次いで資本主義社会になると資本家と無産労働者のあいだの争いが発生した。そして情報革命の現在では、情報所有者と情報音痴の人々とのあいだに、情報階級の格差（デジタルデバイド）が生れつつある。土地、資本、そして情報が、支配と被支配を決定する、と。

こうした階級闘争史観は、前に述べた生態系のいのちの相互作用パターンのうち、相手を害する寄生と捕食の関係を強調した歴史観であって、確かに有力な見方である。この階級闘争史観は、それが提出されることと自体によって、人々の心を変化させ、闘争を激しくさせる。

しかし、それに対する反作用として、人類の歴史は、たえずそうした階級格差を小さくし、人々の生活水準を平準化する方向を模索する歩みとなる。歴史には、作用と反作用の力が働いていて、いうなれば「平均法の法則」(leveling and democratic law) が作用し、右と左の間のバランスを図ろうとする。歴史は、

高き山は崩し、低き谷は埋めようとするのである。

⑤情報史観

このように、唯物史観すなわち階級闘争史観は、十九世紀までの人類史を顧みて構築された歴史観である。それは人間関係に注目し、階級と階級との間の対立と闘争とによって、人類社会が動いて行くという見方である。

その階級なるものは、物質――つまり土地、設備、機械、原材料、衣食住などで、結局は生活手段を生産するための――生産手段を持つ人々と持たない人々との集まりであり、対立闘争は有産階級と無産階級の対立において勃発すると考える。

階級闘争史観は、たしかに一理ある歴史観だが、しかし現代から後の人類史を解読するには、こういう物質の生産のみならず、知識や感情や叡智など「情報」――智財――の生産がより重要な決め手になると見なければならないだろう。古代の枢軸時代に現れた偉大なる宗教家たちの影響は、測り知れないし、科学という情報生産活動、マスコミという情報流通の活動、携帯などによるコミュニケーション行為は、偉大な作用を発揮する。（梅棹忠夫『情報の文明学』中央公論新社、特に五六～五七ページ参照。智財というような概念と情報史観については、公文俊平『文明の進化と情報化』NTT出版を参照。また、認識、科学、情報等の観点から、われわれの地球文明の変容を説く、高瀬浄『近代産業文明の構造と変容』晃洋書房。）

情報の生産、蓄積、流通（通信、コミュニケーション）、分配、消費というものが人類の歴史を動かすというこの情報史観は、従来の唯物史観を包み込みながら、新たな歴史観を提出するものと言える。しかし、

もはや「階級」という「意識を共有する利害集団」は形成され難いだろう。

(三) 因果律――相互扶助か闘争か――

人類の歴史は、対立闘争よりむしろ相互扶助の歴史であって、イエスが教えたように、地を継ぐのは愛を行う者、柔和なる者だ、という歴史観がこれである。

なるほど人類の歴史には、闘争とか競争によって動いて行くという側面が確かにある。けれども、歴史の流れの中では、それよりもお互いに助け合うという愛や慈悲の衝動が湧き出て、人類の社会を進化させて来たし、これからもそうあり続けるであろう。

ナチスのユダヤ人収容所で、同胞の身代りとしてガス室に入ったコルベ神父は、**身を殺して仁をなす**ことの貴い実例であろう。

それによって、愛というものの何たるかが、極限例として、人類に示されるのである。

ところで、人類は、歴史には善因善果、悪因悪果という因果律の法則がちゃんと働いている、と考えた。単なる原因と結果の法則ではなく、善を積む人には善の結果が、悪を積む人には悪の結果が来るのだ、というものである。

これは、生態系のいのちの相互作用パターンの中で、「善をより多く作り出し他人に提供する者が、その見返りとして善をより多く恵まれる」のであり、そういう「応報」（フィードバック）の法則が人類の社会の中で人々の運命を左右する流れとして貫いている、という歴史観である。

善を作り出し善を提供する方法には、売り買いの競争もあるし慈善もあるが、すべての方法を合わせて、確かに人類は因果律史観を求めてきた。

ところで、人類の歴史を初めから現代までつかみ、そして未来予測へと延長し、お互い人間としての生き方――行き方――に見通しをつけようとすれば、長大な段階論が必要である。私なども、田舎から都会に出て来て、少し突っ込んで自分の育った地方の歴史を調べてみたりすると、マルクス主義の歴史哲学の説明もある程度は、説得的に思えたのであった。

唯物史観によると、おおむね人類の歴史は、貧しいけれども、誰も差別しない、バラ色の、郷愁を誘う原始共産社会――古代の桃源郷、大同の世――というものから出発する。そして次に、社会に不平等が生れる。人格を全く認められず物として扱われる奴隷（奴婢）を下敷きにした古代奴隷制の社会が現れる。次いで、奴隷ではないが農奴（及び物作りを担当する職人）と言われるような隷属的な生産者階級を基礎にする封建社会へ……。

この段階論は、私にとって、田舎の古い時代からの状況を知り、意味づけるには親近感があった。

近代になると、歴史は、もっと人間の自由な人格を認めるようになり、何ら生産手段を有しない――いつでもリストラされる――労働者階級と、資本を独占する資本家階級、この二つの宥和なき矛盾を孕む新たな階級社会である資本主義社会へ発展する。そして、人類社会はこんな野蛮な段階から、社会主義社会を通って共産主義社会（コンミューン社会、未来の桃源郷）へと達する。

人類の歴史の前史はそこで終わる。そこから先に、真の人類進化の歴史が開花するであろう。ザッとこういうようなイメージが、一九四一年生まれの一人の若い学生の頭脳とハートを魅了した。

このような段階論を、自由の発展の歴史と見るか、支配の歴史と見るか、神による救いへの段階と見るか、悪魔にそそのかされた堕落の歴史と見るか、それにもかかわらず永遠のいのちへの歩みなのだと希望をもつか。見解は分かれる。が、ともかく、マルクス主義は引力が強かった。人類の歴史は、何らかの種類の段階論抜きには、理解できないのではないか。

時代の段階区別をどのようにつけるか、また段階がなぜ変動し移り行くかについての原因と結果の説明では、個人主義や自由主義では力がないと思えた。他方、英雄物語の羅列だけでも、面白いことは面白いが、どうも満足できない。

人類は何を食うか、何を生活の手段とするか、それをどのように生産し分配するか、「持つ階級」と「持たざる階級」との協力と鬩ぎ合い……そうした観点からの歴史の説明が、より説得的であり魅力的であった。

今日、ソ連の崩壊とともに、マルクス主義亡きあと、一貫した歴史理論が立てられない時代に入ったようだ。だが、マルクス主義は本当に死んだのであろうか。愛の原理に導かれるコンミューン社会という理想は、幻想であったのだろうか。それに代わる理念はどういうものであろうか。

ただ、愛の原理に立つと見えるような社会も、「ルサンチマン」といって「ねたみの心」から平等を主張し、お互いの足を引っ張りあう社会の場合もある。未来の神話はどんなものか。この問いを忘れてはなるまい。

ところで、相互扶助史観をも超える行為が、人類の歴史には現れる。いわゆる「身を殺して仁を為す」と

いうことについては、有名な実話がある。私はこれまで不明にして知らなかったのだが、それをご紹介したい。

一九四一年十二月八日に大東亜戦争・太平洋戦争が勃発したが、その直前の十一月五日、京都帝国大学哲学科の学生、広津正二という青年が、「身を殺して仁を為す」ということを実行された。そのことを、哲学者の高峯一愚先生が紹介しておられる（『カント講義』論創社、二二六～二〇ページを参照）。

広津青年は、大学図書館からカント全集――ドイツ語版――のうち二冊を拝借して、生まれ故郷の朝鮮半島の清津（チョンジン）に帰郷し、卒業論文「カントの実践哲学批判」を書きあげ、天野貞祐先生にそれを提出するため定期貨物船、気比丸に乗船したのであった。ところが、気比丸は浮遊機雷に触れ、たちまちにして沈没した。そのときのこと。

まだ最後の二、三〇人の群れが甲板に残っていた。見ると一人の青年も残り、人々の群れから離れて煙草を吸っていた。

隣の人から早く救命ボートに乗るようにと言われながら、「どうぞお先に」と、決して先を争わず、ついに助からなかったというのである……。

気比丸の乗客が救命ボートに殺到している時、同船に乗っていた移動警官がピストルをかまえ、「乗るのは内地人だけだ」と朝鮮人を制したのを見た広津が、その差別に義憤の念を押さえかね、「私は朝鮮の人たちと行動を共にする」と言って、朝鮮人グループのほうへ移って行ったというのである。

（昭和四十八年一月十七日、読売新聞、大阪版、夕刊より、ルビ追加）

高峯先生は、この話をカント倫理学の「徳と福との関係」のなかで紹介しておられるのだが、その事件の意味するところをどう理解するか。確かに、歴史にはこのような卓越した人物が現れ、その精神的衝撃で歴史の方向が変わる。

さきのマックス・ヴェーバーという社会学者は、常人をはるかに超える「超人力」をそなえた人物を「カリスマ」と呼び、カリスマが歴史の転轍手としての役割を演じると述べた。「身を殺して仁と為す」人も一種のカリスマである。

人類は、一方で戦争をし、究極兵器を開発するという恐ろしいことをしでかすが、同時に他方で、平和を求める努力も積み重ねる。何とおかしなことに、戦争のやり方も、少しは平和的になる。

捕虜を虐待しないようにする条約などを作る。「捕虜の待遇に関する一九四九年八月十二日のジュネーヴ条約」（もとは一九二九年七月二十七日に締結された条約の改訂版）がそれであり、捕虜に対しては、暴行、殺人、傷害、虐待、拷問、侮辱を禁止している。

政府のＯＤＡによる国際間の援助活動も発達している。人類は、今日、一方でグローバル市場という形で激烈な競争を地球大に拡張するとともに、他方で無償の援助を発達させる。援助は、生態系の片利共生という方法を重視した歴史観に立つものである。

以上のようなさまざまな歴史観の違いは、前に説明した「いのちのエコシステム」の中で、いのちのあいだのどの型の相互作用を強調するか、の違いにほかならない。

われわれは、このうちどれか一つの歴史観だけによってか、あるいは幾つかの歴史観を組み合わせてか、人生を送っている。歴史観は地図のようなもので、安心の土台である。人生にとっての道案内であり、カーナビである。多くの人がいずれの歴史観を採るかによって、集団の歴史は、実際にもそのようになって行く。

仮りに目的は善良であるにせよ、目的を実現する方法として「闘争だ、闘争せよ」「報復だ、報復せよ」という人が増えれば、闘争や報復の多い社会となるし、愛を強調する人が多くなれば、愛に満ちた社会となる――ただし、何が愛かについての考え方が対立しない限りである。もしも対立すれば、愛の旗を掲げつつ戦争が起こる。

どんな歴史観を抱くかにより、人類の歴史行路は左右される。人類の歴史は、われわれの頭の中の情報によって、心の中の念によって、ある程度変わって行くものである。

よい歴史観、よい歴史思想を普及させることが、いかに大切か。

(四) 歴史観により「真実」は編集される

自然界は、人間の歴史を記録してくれる舞台である。

筆者の故郷の中国山地西部――石見の国――では、古代、かなり山奥に人が住んでいた形跡がある。中世では平家部落とか、集議谷、一ノ谷というような地名もある。中世から近世の歴史を篤志の庄屋が記した『吉賀記』（六日市町教育委員会復刻版）という書物もある。

今はもう人も住まず鬱蒼と大木が茂る場所なのだが、「タタラ」と呼ばれる鉄掘りと精錬の跡らしきもの

が、炭焼きに入っていて、稀に見つかることもあった。「カナクソ」（鉄糞）でそれと分かる。炭焼きの釜の跡もある。山の頂上に廃れた寺の跡もあって、「鈴の大谷」とか「安蔵寺」という山もある。それが事実として、そういうものの跡かどうかは、遺物によって比較的容易に判定できる（以上は、島根県『柿木村史』『六日市町史』『日原町史』参照）。

しかし、事実関係を少々広げて5W1H、つまり、何時（when）、誰が（who）、何処で（where）、何を（what）、何故（why）、如何なる方法（how）で行ったのかと、事実の関連を詳しく辿ろうとすれば、「正確な事実」は霧の中に閉ざされ、杳として定められなくなる。

遠い昔のこととなれば、本当の事実というものは定めがたい。だから、実に驚くべきことに、日本列島という東海の小島の上では、「神の手」を持つ奇得な御人が縄文遺跡を捏造し、古代史ブームを引き起こしたが、毎日新聞であったか、一人の熱心な記者の探知によってそれが嘘偽りだと判明して、教科書さえ書き改めさせることになった。そういう悲しい人物さえいた。

事実なるものを、そこまでごまかせるのも、歴史ゆえにこそ、であろうか。しかし歴史では、いつまでもごまかしが効くものではない。やはり、事実は「おのずから」明かになっていくのだ。それを「真実」という。

歴史に限らず、科学では多かれ少なかれそうであるが、無限の「基礎事実」つまり「素実」の中から特定の情報だけを汲み取り、選択し、編集し、記録するという行為が、その無限の素実の上に重なってくる。これは「真実」を確定する際の手続きである。ややもすれば、そこに虚偽りが加えられることになる次第。

発掘によって、千年万年の埋もれた暗黒から掘り出されて陽の日を見る遺跡や、遠い昔に文字で書かれた

記録が出てくる。その遺物や書かれた文字自体は実物であるが、しかし、その実物の遺物や書かれた文字の情報が、果たしてどこまで真実を正確に伝えるのかは、なかなか確定しにくいのである。

ある時代の素実群は「無限」に存在するはずだが、われわれは、それについての限られた情報を選び取って記録する。歴史とは記録することである。そのとき、特定の哲学と意味を込めた「編集」「編纂」という作業を加える。

「真実」というものは、元の素実それ自体ではなく、フルイにかけられた上での、限られた情報であり知である。提示されるのは、元の素実に編集という操作が加えられ、選び抜かれて出来上がる事実である。これが歴史上の真実というものである。それは人間により、「編集され選択された」真実なのである。

歴史における記録という作業は、所詮、捨てることのうえに成り立つ行為にすぎないのではないか。表の記録作業に対し、その裏には選択されない圧倒的多数のデータの捨て子があり犠牲がある。編集とはそれを片付けることであり、一種の掃除である。

編集によって、非常に多くの事実が棄てられてしまう例の一つに戦争の記録がある。

戦争とは、最も激しく、悲しい、いのちの争いであるが、筆者は、一九八一年にビルマ（その後ミャンマーに改称）を訪ねてマンダレー市の郊外を歩き、水田の傍に幾つも立っていた――建てられていた――日本兵の墓を目撃したことがある。竹山道雄『ビルマの竪琴』の強烈な印象を現地で確かめてみたかった。

土地の人々が建ててくれたものか。しかし、それには名前は彫られてはいなかった。そのように戦場で斃れた人々の姿は、多くの場合、どこにも細かに記録されていないものである。

かの「ビルマ戦線」とか「インパール作戦」の記録というような「大まかな記録」は公式の正史として遺

されているが、記録の編集に当たって棄却され無視された情報は、決して少なくないであろう。

筆者の郷里の隣家では、たった一人の跡取り息子――永安幸弘さん――が、出征して帰らぬ人となられた。その家は跡継ぎが途絶えた。幸い、奥さんの親類縁者から優秀な婿養子さんを迎えて家名は続いている。その実の跡取り息子さんの死の最後の姿については、その家の両親に何の記録も伝えられていない。アッツ島から出された一枚のハガキあるのみである。

そのことを子供の私に語ってくれる時の、老いたご両親の物悲しげであったお顔が、いまでも浮かぶ。そのお爺さん、お婆さんは、とっくの昔、幽明界を異にして、もうこの世にはいらっしゃらない。あの世で息子さんと再会しておられるのであろうか……。

今から五十年昔、一九四五～五〇年頃には、そういう英霊の家は多かったはずである。この箇所を書いている二〇〇二年という歴史の現在では、もはや親の世代は百歳を超えてほとんど幽界に赴かれたであろうが、歴史はそれをも忘却の彼方に追いやるのだろうか。

「忘却とは忘れ去ることなり」……（菊田一男「君の名は」より）。

先に掲げた村史でみると、東北の山村出身者で戦死した人々の何と多いことか。『山内村史』によると、日中戦争・大東亜戦争・太平洋戦争という第二次世界大戦中に戦死した方々は百数十名にのぼり、その年齢は若い人で十七歳余、殆どが二十歳台前半である。戦死した所は中国大陸から南洋諸島のニューギニア、サイパン、ルソン島、ラバウル、マリアナ諸島、ビルマ、ペリリュー島など、全域にわたっている。筆者の郷里たる柿木村もほぼ同様の状況であった。

この方々のうちには、結婚もせず戦地に出征し、この世に子孫を残すことなしに一回きりの地上のいのち

を終わった方たちが多かったに違いない。われわれは、「英霊」とは何たるかを忘れてはならない（『山内村史』及び『柿木村史』参照）。

翻って、今の世の中の住人であるわれわれは、みずからの生活がそういう「英霊」の方々の献身の上にこそあるのだ、ということを忘れてはならないと思う。逆に、かつての敵方からすれば、真反対の感想があり得ることもまた、忘れてはならない。

隣国のある人たちの曰く、「傷めつけられたのだから謝罪しなければならない」と。ここに靖国問題の生れるゆえんがある。

英霊の魂を永久（とわ）に祭るには、個々の家の子孫が絶えていく今、どんな方法がよいか、われわれは速やかに考えねばならぬところにさしかかっている。各地の忠魂碑などは草ムラや木立ちの中に忘れ去られようとしている。

（五）歴史には、さらに「心実」という要因が働く

かの『平家物語』（一二二三頃成立）は、次のように説き始める。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。
沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。
おごれる人も久しからず、唯春の夢のごとし。
たけき者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

これは、我が国の「軍記物」を中心とした歴史小説の原型である。しかし、厳密な戦争記録としての「戦史」ではない。それぞれの戦場で、戦う人々に記者がついて回り、戦いのあり様を確実に書き留めたものかというと、そうとは言えまい。

そのようなことは断じて不可能である。広い戦場で時間をかけて次々と起きてくる事柄を、こと細かに記録するなど、どだい無理な仕事である。

大岡昇平さんの『レイテ戦記』は、膨大な資料と現地調査を基にした貴重な作品であるが、それにしても無限の事実群の写真とは違い、編集された真実であり、そこに心実が重なっている。作家大岡さんの執念である。

従軍記に、「塗炭の苦しみ」や「にがみ」を記すものと、「さわやかな追憶」を述べるものと、両極が同時にあり得るのである。

だからそこに、選択し、編集し、記録する者の「心理」が働き、価値や意味の上での解釈が入り込む。歴史が「心実」となるゆえんである。

編集と記録の際には、どの資料を採用しどれを捨てるかについて、取捨選択の心が働かねばならないが、そこに編集者の好き嫌いとか、物事の位置付けを決める価値観が入り込むことは避けられない。否、積極的に必要ですらある。それがどの程度かといえば、科学において最も小さく、宗教において最も大きく、歴史はその中間であろう。

編集され記録された「心実」（物語）としての歴史は、人間の知的営みの中で、最も人間臭いロマンをか

き立てる領域であろう。宗教や科学技術と比べ、それら以上に生きた人間が丸ごと、いのちを懸けてかかわるからである。科学では自然と人間との関係のみが、宗教では神と人間との関係だけが中心となる。

歴史がことほどさように、最もロマンをかき立てるのはなぜだろうか。科学のように完全に確定された事実でもなく、宗教のように完全に信仰の世界でもなく、真実を含みながら、かつ記録者の空想と心情とを混じえた心実を重ねて、人間に訴える心の像を描き出し、表現するからであろう。歴史は、作曲された交響曲にも比せられよう。

歴史とは、ロマンの領域でもある。不確定でファジー（あいまい fuzzy）な性質を帯びた事柄から成る領域でもある。そこに歴史論争の難しさのゆえんがあるだろう。

例えば、むろん、善意からであろうが、古代の「記録」――『古事記』など――をひたすら美しい絵を加えて英雄物語として記述し、民族の歴史を飾り、そのことに満足する人々がいらっしゃる。各国の民族や国民の歴史においても、そのような例がいくらでも見出される。私自身、歴史のそうした美しい物語に心引かれる。誰しもそうではないか。歴史の事実は、悲喜交々であり善悪糾えるものであって、美しくもあり醜くもある、というのにである。

歴史というものは、物語作りをしてみたくなるほどにも、人間の情念を燃え上がらせ夢をかき立てる。それだけ、豊かで奥が深く、幅も広くて、自由な空間なのであろうか。

しかし、一般の学問的な歴史編纂の領域では、すなわち一般の「歴史」の研究では、実証性・科学性を旨として記述することが、当然の原則である。

そこに偏見とか、各国の立場を強く擁護する政治的観点が混じることは、学者といえども人間であるから

やむを得ない。しかし、ともかくこの領域では、学問的な「実証」の手続きを経て真実に到達することが望まれる。

もちろん、文学や趣味に属するフィクションとしての「歴史物語」はこの限りでない。それには、作者の作為が混じってもよい。それらは百パーセントの歴史の事実を語るものではなく、よくいえば芸術、小説、創作なのだからである。吉川英治『宮本武蔵』はその典型であり、そこに人々の心実に訴えるものを秘めている。

佐々木小次郎は青年剣客であったのか、老境に達した人物であったのか。吉川氏は前者の小次郎を選んで武蔵と闘わせたのであった。創作たるゆえんである。

司馬遼太郎さんの『龍馬がゆく』で有名となった坂本龍馬。京都の隠れ家で彼を暗殺したのは、居合いの達人であった「らしい」のだが、よくは分らぬ。そこに「物語」というものが成り立つ余地が出てくるのであろう（入交好保【龍馬読本】龍馬生誕一五〇年記念事業実行委員会刊、高知）。

ところで、心実には、それを表す言葉が伴う。だから、歴史の心実に伴って言葉も歴史の不可欠の要因となるのである。

イギリスのノーベル賞作家、ラアディヤート・キプリングさんは、こう言っている。

「言葉は、人間が用いる中で、最も強力な薬である」

だが、言葉は、良薬にも、毒薬にも、劇薬にもなる。

言葉使いは、栄養にも、呪いにも、人を切る刃にもなる。言葉は、お酒のようであり、適度であれば薬に

もなるが、過ぎると泥酔する。

禅では「不立文字」といって、無限の事実は言葉で表せるものではない、悟りは言葉では不完全にしか得られぬという。しかし、だからかえって、人間は言葉から離れられないのではないか。

われわれは、「リンゴとミカンではミカンがおいしい」と感じたり、「二分の一に二をかけると一になる」と考えたり、「泥棒をするよりボランティアをしたほうが良い」と判断したりする。そのとき、われわれは、瞬間、瞬間、口に出さない内言語というものも含めて、かならず言葉を使っている。感じたり、考えたり、判断することを、われわれはみな言葉を手段にして行い、言葉によって確かめるほかない。

曰く、「はじめに言葉ありき」と。そして、人類の歴史には、絶えず言葉あり、であろう。

そうした言葉が、人類の歴史を作り、記録を可能にする。

敷延すれば、一般に「言葉が歴史を作る」とさえ言える。個人であれば人生をつくり、それを記録すれば伝記となる。たくさんの人の伝記を集めれば民族や国の歴史にもなる。そして、各国、各民族の文化は、独特の宝の言葉を持っているものである。

ところが、われわれの使う言葉には、それぞれ一人ひとりの癖というものがある。

入試に失敗したり、会社が倒産して、

「アーア、モウ自分ハダメダ」と絶望するか。

「ハハーン、もっと自分の適性に合うところに目を向けなさい、という神仏のお導きナノダナ」と考えるか。

どちらに考えるかで、たちどころに心が正反対の道に向かって歩み始めることになる。

言葉には、プラスの言葉とマイナスの言葉とがあって、多くの場合マイナス言葉はいのちを萎縮させ、プラス言葉はいのちを伸ばし育てる働きをするのではないか。

例をあげよう。日本人の左利きのプロゴルファーで、しばしばアメリカのPGAツアーの解説チームに加わっている方だが、好ましくない発想と言葉の癖が目立つ。

「あのコースは難しい」

「このパットは大変だ」

「緊張する」

などと、ことごとくマイナス言葉を多発する方がいらっしゃる。解説者として失格であり、プレイヤーとしても大成しなかった。惜しいことである。もっとプラス発想とプラス言葉を使えないものかと思う。

言葉は人生の杖である。**杖言葉**ともいえる。

世に「名言集」、「ことわざ集」、「箴言」といったものがあり、永遠のロングセラーとなっている。それらは、真実の世界への門に掲げられている案内記号なのであり、よく読まれる。それは、人々がその門を捜し求めているからであろう。

「鏡は人の顔を映し出すが、その人が実際にどういう人物であるかは、どういう人を友人に選んでいるかに表れる。」（『聖書』）

「よい友人は健康にもよい。」（アーウイン・サラソン）

（以上、キプリングさんはじめ、名言の引用は、ジェフ・ケラー著、弓場隆訳『できる人とできない人との小さな違い』ディスカヴァー・トゥエンティワン社、を参照。）

歴史は、重大な働きをしてきた言葉の事例でもって満杯である。人類の歴史は、言葉によって発展して来たとさえ言えるのである。そして、言葉は言語であるが、言語では文字が決定的な働きをする。

ところが、現代は文字離れの時代。こうなってくると、昔から言い伝えられて来た言葉、特に良い言葉というものが廃れる。なぜなら、言葉は口に出し耳に聞く音声とともに、目で見てとらえる文字記号によっても表されるが、文字を読まなくなると、やがて口にも出さなくなるからである。

それに文字記号は、手によって書かないと、使えなくなる。読み、書き、そろばんというが、音、読、書は、言葉の学習の三拍子ではないだろうか。

昔から祖国に伝わった言葉を棄てる国民は、先人の文化を棄てる国民である。

現代日本のわれわれには、祖国の古典を十分に学ぶ機会が少なくなっている。日本の古典とは、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』などに始まる書物とその精神であり、それに次ぐ歴史上の古典であるが、日本ではそれを殆ど教えない。

アメリカの良質の学校教育では祖国の歴史を教え、私学には、建国の精神の基礎になった『聖書』を暗記させるという教育を行うところさえある。

古典の言葉は今の日常の言葉と異なって難しいから、敬遠し、受験学習でちょっとだけつまみ食いする程度の学び方にとどめる。しかし、古い言葉でもじっくりと繰り返して学べば、相当のところまで理解し身につけることができる。神楽とか歌謡というような方法も含めて、文化や教育に取り入れ、古人の遺された思想と言葉を暗記するほど学びたいものである。

われわれは、祖国の歴史の中に、先人たちの遺したよい言葉を見つけ出そう。そして、二百回も繰り返して考え、言葉に表し、口に出して唱えるということを練習すれば、それが身について、よい習慣になるそうだから、よい言葉を繰り返し習って後の世に伝えよう。

私は子供のころ、せっかくの神社の神楽の言葉が、古語ばかりで分からなかったが、神社とか寺院側も、言葉として大衆にも分かるように、解説の文書を作り、参詣・参拝の人々に教育する、という努力を始めて欲しいと思う。

島根県は出雲の国と石見の国とからなり、ともに古い文化を保存するところであるが、この点、先程述べた国境の村、六日市町に伝わる神楽について貴重な記録が纏められた。島根県古代文化センター編『抜月神楽――島根県鹿足郡六日市町抜月――』（平成十四年三月）がそれである。この調査報告書には、ビデオもついているが、地区の風土、歴史、神楽の来歴、参加した／する人々、演じる物の内容、言葉の採集が完全に行われ、土着の旧い言葉が保存されている。

この記録は、自分たちの郷土がどのような先人と文化により生きて来たかを教える。歴史とは、何も大掛かりな国家の歴史のみではなく、各地の歴史にも、味わい深いものがあることが分かる。一例としてご紹介したい。

神楽は、舞子というものが主に青年から構成され、テレビも何もない村や町にとって掛け替えのない娯楽であり神事であったから、そこには意味深い言葉が盛りだくさんあり、今でもそうである。その一部の言葉を挙げよう（資料編を参照）。

洞乃口開き
千速振る　玉の御簾　巻き上げて　神楽の声を　聞くぞ嬉しや
幣立つる　此処も高天の　原なれば　集まりたまえ　四方の神々

潮祓い
伏し拝む　社に神は　降り給え　心の水が　澄めば映らん

神迎え
心だに　誠のみちに叶いなば　祈らずとも　神やまもらん

これはほんの序の口である。今でも方々の村や町の青年たちは、このような言葉と物語を、最長、三昼夜、歌い続け舞い続けるのである。神楽が伝達する文化情報と知恵には偉大なものがあるといえよう。都会のディスコなどで歌い興じるのも現代風でそれなりによいが、このような神楽に見られる歴史の英知とその言葉を楽しみ、かつ伝えたいものである。

もちろん、こうしたよい言葉を重視するためには、歴史上の言葉を、それぞれの当時の使い方における元の意味で、正確に理解することが前提となる。それは、科学的な態度として、いうまでもない。

例えば、今日の「支配」という言葉が、元来は人を支配するという意味でなく、配分、配布、割り当てな

どの意味であったこと、また「時宜」を得るの時宜が時の権力者の意思と判断を示す言葉であった、などである。この点、稲作中心と都中心に偏りがちな歴史認識の傾向を免れて、漁民や山の民にも注目し、非稲作のくらしにも目配りして、「日本」の歴史像を丹念に掘り起こす研究を続けられた故・網野善彦『歴史を考えるヒント』（新潮選書）を参照されたい。

ただし、網野先生は、ご自身の私的な「心実」としては、日本の建国神話や建国記念日（二月十一日）を認めない立場を採られる。私は、このノートで、出来るだけ互いに反対の立場を示す文献も並べて比較する、という書き方をしている。日本人は、反対の立場の人との論争に強くならねばならぬからである。

また、「文化」という言葉も要注意である。それは、

①武力による力づくでの支配でなく、「文にして化す」という中国古代の意味での非武力政治と、
②「耕すこと」（culture）という意味と、
③物質的装置である文明に対する「人間の精神の産物」、

という三つの意味がある。その上、さらに、

④利害打算の心をもった人々がつくる市民社会ではなく、「高度な共同精神にもとづく人々の社会」という意味があって、「文化国家」という風に使う。

この最後のものは、昔、ドイツのベルリン大学を創ったフンボルト（一七六九～一八五九）や、教育家のペスタロッチ（一七四六～一八二七）などが文化に込めた意味である。

言葉は、その歴史に沿って、慎重に理解すべし、ということであろう。

（六）歴史教育では、三実を調和的に教える

これとの関連で、歴史教育の課題が浮かんでくる。教育は研究と同じではない。

特に義務教育では、事実と、素実と、そして心実が教えられるが、何でもよいから教えてよいというものではない。特に、国家や父母が子供たちに期待する人間像にとって求められる教育的な歴史像というものがあるのではないか。

歴史教育では、素実よりも、真実と心実のウエイトが大きくなる。それだけに、イデオロギーも絡んだ歴史判断をめぐって争いが厳しくなる。それは、どうしても避けられない。教育内容の選択は、過去の歴史を基にしながらも、未来に向けての価値の選択であり、選択は一種の決断なのである。

大人は、子供たちの世代がいのちをより良く伸ばすために役立つ情報を、選りすぐって教えなくてはならない。

われわれの子供たちのいのちを伸ばすには、素実、真実、心実という三実に関連して、以下のような点に気をつけるべきだと思う。

①第一の「素実」については、物事を確かめる実証的で科学的な方法をきちんと教えることである。つまり、物事を判断するとき感情的にならないことである。理性を失ってはならないのである。もちろん、人生には感情は必要であり、判断に感情が入り混じることはどうしても避けられないが、教える側の好き嫌いの感情を、子供たちへの歴史教育に安易に混じえてはならない。

例えば、人が

「古池や蛙とび込む水の音」

と謳ったときに、はたして蛙は一匹であったのかどうか。英語に訳すときには主語を単複のどちらかに決めなければならない。だが、蛙が単数か複数かは、この蛙という文字だけからは決められない。

専門家によれば、日本人は「一匹と思いたい」という文化的傾向があると言われ、一人とか一つなど、どうも孤独を好む民族らしい。しかし、素実としては、蛙は普通たくさん群になって棲むから、おそらく飛び込んだのは一匹ではなかったであろう、と推測される。

②第二の「真実」については、たくさんの事実から幾つかのものを選択して組み合わせる編集作業が行われるが、ここでは、いのちにとって何が不可欠か、何が重要か、判断しなければならないから、判断する側の観念が影響してくるし、また必要でもある。

例えば、「越後の良寛さん」（一七五八～一八三一）といえば、日本海に面した国上山の中の「五合庵」というところで一人住まいをされたということになっているが、実際、冬にそこを訪ねてみると、庵はいたってみすぼらしく、日本海からの雪と風が吹きつけて、寒い所である。真冬に、どのようにして暖房と食事を用意しておられたのか。

五合庵は、冬、雪まじりの寒風が、日本海から直に吹きつける。手足が凍えるほどにすさまじき寒さであったであろう。中国山脈の冬山に父と炭焼きに通った私の経験からすると、一個のいのちの身体の温りなどは、押し寄せる圧倒的な寒気に、吸い込まれて消し去られる。

そうした越後にも、一個のいのちの、漂泊の姿があったのだ。

足曳の国上の山の冬籠　岩根もりくる苔水の　かすかに世をばすみ渡るかな

たくほとは　風がもてくるおちばかな

この里に　手鞠つきつつ子どもらと　遊ぶ春日は暮れずともよし

たらちねの　母がかたみと朝夕に　佐渡の海べをうち見つるつかも

うらをみせ　おもてをみせて　ちるもみぢ

天上大風

大島晃さんはいわれる。「良寛には人の心を優しく癒してくれる秋の日の日溜まりの温かさがあります」と。

晩年の良寛と会い、最後のお世話をされたという貞信尼（明治五年没）は歌っている。

君にかく　あひ見ることのうれしさも

まださめやらぬ夢かとぞ思ふ

歴史には、国と国との争いなどという荒々しい局面もある。このような静かな、しかし厳しい暮らしぶり、また心温まる人間模様もある。いずれも人類のいのちの姿ではある。

これは、過去の文化人の「暮らしという真実」に光を当てる新しい研究方法である。三内丸山遺跡を訪ねると、古代の縄文人が何を食べていたか、どんな方法で冬の暖をとっていたか、調べてある。同じことを、良寛さん個人についても調べることが有益なのである。なぜか。

良寛さんの暮らしは、われわれにとって、一個人の老後のいのちのモデルであり、高齢化社会にとって大いに参考になるのである。一人の伝記は、多面的に書かれ、また読まれるべきではないだろうか。

思想や書きものだけでなく、つまらぬ事のようでも、毎日のいのちをつなぐ食べ物やお金や衣類や住みかのことにも、光を当てるべきではないか。

良寛さんについての伝記を読んでみても、あまりこの方面の記録はない。どうも、「くらし」抜きの伝記になっている。殆どの著作者がそんなことには関心がなく、もっぱら良寛さんの歌や詩や書き物の方に注目してきたからであろうか。

一人の人物の人生という「いのちの歴史」を研究するとき、ここに今後の研究課題の一つが残されているのではないか。（相馬御風『大愚良寛』は名著。出雲崎近くの良寛記念館で改訂新版が手に入る。ほかに、大島晃『良寛への道』考古堂書店、谷川敏明『良寛の生涯と逸話』恒文社、などが有益。）

③第三の「心実」については、人間の希望とか願望を表す物語が作られ、そして語られる。ここには、個人の趣味の問題ではなく、まさしく国家の教育政策が顔を出す。

その顕著な例は、近代日本の「教育勅語」の制定（一八九〇）に見られる。勅語は明治時代以後の教育の根幹を定めるものであった。

明治天皇（一八五四～一九一二）と、井上毅と元田永孚など周囲の碩学たちが、いかに慎重に、吟味に吟味を重ねて制定したか、国民は今、先人の配慮と苦心を、改めて知るべきだと思う。教育勅語については、他の機会に詳しく吟味してみるが、一神教的な意味での宗教に立ち入らず、国民道徳としての勅語を目指し

たのであり、先人の周到な考察は敬服に値する。（古い本だが、渡辺幾治郎『教育勅語の本義と渙発の由来』などが参考になる。）

アメリカの「独立宣言」（一七七六）とフランスの「人権宣言」（一七八九）の審議過程も、調べると実に面白い。

フランス人権宣言の審議では、グレゴワールという神父さんが、義務宣言を加えるべし、と強調した。権利一方だけの宣言では不十分であり、権利は神から頂いたものであるのに、あたかも人間が自然に有するかのごとく述べ、また神に対する義務を何にも書かないのは間違いである、と反対意見を主張したという。（この点は、難波田春夫『道徳と経済』廣池学園出版部。また最近の紹介は、長谷川三千子『民主主義とは何なのか』文春新書。詳しい文献上の研究はジャン・モランジュ『人権の誕生』有信堂高文社、を参照。）

明治の大日本帝国憲法の制定（一八八九）を、昭和のマッカーサー憲法つまり日本国憲法の制定（一九四七）、それに教育基本法の制定と比べるとよい。そこに、制定者のどのような思いがかかわっていたかを国民は知らねばならない。後に判明するように、明治憲法には統帥権独立という軍のゴリ押しを許すこととなる盲点が含まれているが、新しい日本国憲法にも、アメリカ側が占領政策の一環として大急ぎで制定したので、時代の進展と共に、根本的な欠陥が目立つようになってきた。

こうした点についての学習は、国家と国民という「集団のいのち」のレベルで、自分を知るための学習なのである。国民とは、今生きている者の世代だけではなく、代々の先人のいのちを昔から引き続いて受けている「連続した世代」の全体と考えるべきであり、先人による制定過程での精神が分かると、憲法とか勅語とか基本法が、先人の悲願とともに、われわれの心に生き生きと迫ってくる。

なお、GHQが日本占領にあたって、日本人の精神を――自由主義化、民主主義化、そして出来ることならば、キリスト教化へと――いかに革命しようとしたかを知らねばならぬ。それを知るための案内としては、ウィリアム・ウッダード『天皇と神道』（サイマル出版会）が手頃である。サイマル社から訳が出ていたが、惜しいかな同社は歴史から姿を消した。それも悲しくも無情の歴史の現象だろうか。

確かに、マッカーサーは、日本人をキリスト教化しようと努力したようである。いわゆる「自由主義史観」をとる人々にも、天皇制（制度）とその精神の内実についての吟味は避けて通っているように思われる人々が、多く見受けられる。「さわらぬ神にたたりなし」なのか。

占領とは、占領する者によって行われる、占領される者の作り変えであり、占領者が被占領者を改造し、自己像に近づけようとすることである。その核心は国民精神の改造にある。（この真実をウッダードのこの本は十二分に物語っている。また、GHQによる改革について、GHQへの盲従ではなく、自覚的、自律的に記録せんとして著されたものとして、名越二荒之助『大東亜戦争と被占領政策』（展転社）も併せて参照したい。）

歴史とは、敵味方いずれにせよ、真剣な人が真剣に創造するものである。そして、歴史を辿ることは、自分のいのちの根っこを探し出し、そこから生えた芽と幹を確かめ、今度は自分自身でそれを天空に向かって育てることである。これが、歴史の創造ということである。

参考文献（事項ごと、訳を含め邦語文献のみ）

①歴史の見方

板垣與一『アジアとの対話』一～五集、論創社。
ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義』岩波文庫。
マルクス／エンゲルス『共産党宣言』岩波文庫。
網野善彦『歴史を考えるヒント』新潮選書。

②日本史

『古事記』『日本書紀』『万葉集』各種の版あり。
下中弥三郎『日本史料集』平凡社。
日本古典文学大系『風土記』岩波書店。
菊地恵一『北天の鬼神』岩手日報社。
司馬遼太郎『龍馬がゆく』文藝春秋。
入交好保『龍馬読本』龍馬生誕一五〇年事業実行委員会（高知）。
渡辺幾治郎『教育勅語の本義と渙発の由来』藤井書店

③現代史

ピーター・ドラッカー『断絶の時代』ダイヤモンド社。
堺屋太一『油断』日本経済新聞社

④イスラム文明

山内昌之『文明論としてのイスラーム』角川書店。
モハメット『コーラン』岩波文庫。
片倉もと子『イスラームの日常世界』岩波新書。
黒田壽郎『イスラームの心』中公新書。
板垣雄三『対テロ戦争とイスラム世界』岩波新書。
藤原和彦『イスラム過激原理主義』中公新書。

⑤大陸の歴史論

新釈漢文体系『詩経』秋田書店。
新釈漢文体系『禮記』秋田書店。
宮崎市定『史記を語る』岩波文庫。
中島敦『李陵』筑摩書房。

⑥言語と歴史

高島俊夫『漢字と日本人』文春新書。
イソップ（塚崎幹夫訳）『イソップ寓話集』中公文庫。
ジェフ・ケラー『できる人とできない人との小さな違い』ディスカヴァー・トゥエンティワン社。

⑦地方の歴史

『山内村史』同役場（秋田県）。
『遠野市史』同市（岩手県）。
『平鹿町史』同町（秋田県）。
『岩国市史』同市（山口県）。
『日原町市』（沖本常吉編）、同役場（島根県）。
『津和野町史』（沖本常吉編）、同役場（島根県）。
『柿木村史』同役場（島根県）。
『六日市町史』同役場（島根県）。
六日市町教育委員会編『吉賀記』復刻版、同役場。

島根県古代文化センター編『抜月神楽』（島根県六日市町抜月の神楽の調査記録）。

⑧いろいろな文明論

ケネス・ポールディング『地球社会どこへ行く』講談社学術文庫。
和辻哲郎『風土』岩波書店。
梅棹忠夫『文明の生態史観』中公叢書。
オダム『生態学』築地書館。
松本健一『砂の文明・石の文明・泥の文明』PHP新書。
川勝平太『文明の海洋史観』中央公論新社。
松井孝典『一万年目の人間像』WAC。
梅棹忠夫『情報の生態史観』中央公論新社。
公文俊平『文明の進化と情報化』NTT出版。
高瀬浄『近代産業文明の構造と変容』晃洋書房。
伊東俊太郎ほか『思想史の中の科学』平凡社。

⑨近代思想の課題

難波田春夫『道徳と経済』廣池学園出版部。
長谷川三千子『民主主義とは何なのか』文春新書。
ジャン・モランジュ『人権の誕生』有信堂高文社。
ウィリアム・ウッダード『天皇と神道』サイマル出版会。
名越二荒之助『大東亜戦争と被占領政策』展転社。

⑩その他

『法華経』岩波文庫。
高峯一愚『カント講義』論創社。
竹山道雄『ビルマの竪琴』中公文庫。
大岡昇平『レイテ戦記』中公文庫。
相馬御風『大愚良寛』復刻版、考古堂書店。
大島晃『良寛への道』考古堂書店。
谷川敏明『良寛の生涯と逸話』恒文社。